
先輩なんて大嫌い。

0 . 5 %

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先輩なんて大嫌い。

【NZコード】

NZ8386T

【作者名】

0・5%

【あらすじ】

「俺、お前のこと嫌いだわあ」

私は、柵先輩が苦手だ。だから、先輩にそんなことを言われても、全然気にしなかった。ただ気になるのは、どうして先輩が、私の近くにくるようになったのかだけだった。

自分の思っていることを言えない弱虫少女と、何事にも物怖じしない少年の、不器用な恋愛ストーリー。

「私だって、先輩のこと嫌いですよ」
そう言えれば、私は、どんなに楽なんだろう。

「あ、三神さん」「はっ、はいつ」「これ、教室に持つていってくれる?」「え、あ、その……、」「アタシ、用事があるの! お願ひ!」「うん、いいよ……」「ありがと! よろしくね!」「

いつもそう。

人に反抗できなくて、言いなりになつて。自分の意見も言えなくて。そんな私のことを、みんな、都合のいいように使つているんだろう。

そんなの、本当のところ嫌だ。私だって、好きなことをしたいし、言いなりになんかなりたくない。でも、私は人に反抗できない。だから、言われたことをするしかないんだ。

こんな人形みたいなこと、したくないのに。

今年の春に高校生になつた私、三神慧は、中学校の頃とあまり変わりの無い生活を送つていた。変わつたことと言えば、たくさんの学校から人が来てるため、あまり知人がいないことぐらいだ。入学したては、みんな、友達をつくるために、人気になるために、

焦るだらう。どうにかして自分の信頼を寄せよう。そういう思いがあるのだろう。

しかし、私はそんなこと、どうでもよかつた。

幼稚園のときからずっと、私には友達があまりいなかつた。いても、5本の指が埋まるか埋まらないかという数。

もともと、私は臆病で人見知りが激しい。友達が少ないのは、そのせいもある。話すのも苦手だし、自分の意見も言うことができない。その上、泣き虫で、弱虫で、怖がりで。周りにはいつも迷惑をかけてしまう。

そんな性格のせいが、私はよくパシられる。

先生に頼まれた仕事を無理矢理押し付けられたり、荷物持ちをさせられたり。

自分の意見を言うことができない私を、周りの子は、いいように使っている。

本当は、私だって、好きなことをしたい。パシリなんて嫌だ。自分でやれって言いたい。それが言えてれば苦労はしないんだけど。でも、反抗するのが怖い。自分の意見を言うのが怖い。人に何か言われたらどうしよう。

こんなことを考えてしまって、結局、私は言いなりになってしまふ。

私は、そんな自分が嫌いで堪らなかつた。

そんなある日のこと。私は、いつもどおり、人に仕事を頼まれ、廊下を歩いていた。

廊下の窓際には、女子たちが数人固まって、何かを話していた。そんなことには興味はない。

そう思いながら擦れ違ったとき、私の耳に、会話の一部が入つてきた。

「この前のバスケの試合、見た？」

「うん、見た見たっ」

「 榎先輩、超カッコよかつたよね！！」

「 ねーつ！ 私、先輩に惚れ直しちゃったあつ」

「 先輩、彼女とかいないよねー？」

「 えー、いないでしょ

.....」

榎先輩の話か……。先輩人気だな……。

あの子たちが言つていたのは、校内で一番人気がある榎瑞紀先輩のことだった。

榎先輩は、二年生でバスケ部だ。容姿端麗、眉目秀麗、そんな言葉たちを擬人化したような人だ。ざつくばらんな性格で、何事にも物怖じしない。誰にでも自然な感じで接することができる人。言葉遣いが悪いらしいけど、そこがまたいいとか。とにかく、榎先輩はモテる。男子にも女子にも。

え、私はどうかつて？

……正直言うと、私は榎先輩に興味はない。というか、榎先輩は私の苦手なタイプの人だった。だから、話そうとも思わないし、好きとも思わない。

それに、先輩は私とかけ離れたところにいる人だ。私には直接関係のない人だから、どうも思わない。

さ、早くしないと休み時間が終わっちゃう。急がないと……つ。

この後、私と榎先輩が関わることになるなんて、このときの私は思いもしなかった。

01 · 私（後書き）

ビーもつ。ソジファンのせいで小説を書いてゐる〇・5%で一す

モード二三〇二

だって、N-Lとかむずい！！ 大変！！

こんな感じですが、頑張つてみよつと思ひます。
.....。

「三神ちゃん」

次は移動教室だなあ。早くしなくちゃ。

そう思つて私が教科書を持って廊下に出ると、同じクラスの齊藤梨花子さんが近寄つてきた。

この人は、ショッちゅう私を使う人だ。私は、この人が大嫌いだつた。

どこか気取つていて、自分が中心にいないと嫌で、人のことを馬鹿にした感じがしているから。

「…………なんですか……？」

そんなことを考えつつ、それはおぐびに出さないよにしながら返事をする。この声は、私のことを使おうとしているときの声だ。齊藤さんは、私の考えていることも知らずに、私に顔を近づけてくる。

「ねえ、これ、持つていってくれない？ あたし、重いもの持てないのよ」

何が重いものだ。今普通に持つてるじゃないの。私はそう思つた。

でも、私がそんなこと言えるはずもなくて。

「え、あの、その、っ」

「ねつ、お願ひ！ あたしたち、友達でしょ？」
誰も友達になつた覚えはありませんよ。

そう言いたいのに。

どうして、言葉が出てくれないの…………っ――！

今日も、私は人によく使われるんだ。反抗できないから。

「ねえ、やつてくれないの？」

「う、その、あ、」

「やつてくれるわよね？」

何も言えず、こいつたえている私を見て、齊藤さんが笑いながら迫ってきた。

もう、やだ……つ。

視界が霞む。ああ、また泣くのか、私。泣き虫だな。なんだよ、

私。

泣きたくなんかないのに、涙は私の言つことを聞いてくれないで、
出よつとする。外へと、零れよつとする。

やめてよ。やめて。

「も、やめて……つ、

「お」

「え？」

「ふえ……、？」

私の涙が一粒零れたとき、声がした。聞き慣れない、聞いたこと
のある声。

顔を上げると、そこには、

「くつ、門先輩つ！」

門先輩が、齊藤さんの肩を掴んでいた。

「せ、先輩、なんでいるんですか？」

「そりや学校だし、俺がどこにいてもおかしくねえだろ」

「そうですけど……」

突然のことに、私は声が出なかつた。
どうして先輩がいるの。

なんで……？

「お前さ、自分の教科書ぐらい、自分で持てよ」

「え、これは、そのつ、三神さんが自分からやつてくれてつ

「ふーん……。じゃあ、なんでそいつ泣いてんだよ」

「えつ？」

先輩が私のほうを見て言つ。驚いた斎藤さんがこっちを向く。

「お前、なんで泣いてんだよ」

「え、その、……」

私が本当のことと言えずに黙つていると、斎藤さんが教科書を持って行つてしまつた。

そのときにも、私を睨んだ斎藤さんが怖くて、また泣きそうになつてしまつた。

「おい」

俯いて泣きべそをかいてる私に、先輩が話しかけてきた。
「この人は、苦手だ。身に纏つている雰囲気とか、私の大嫌いなやつだ。

そう思つていると。

「お前、なんで自分の思つてる」と言わねえんだよ」

先輩が、私に言つてきた。

一瞬、息をのんだ。

見られてた。

あそこを、見ていたんだ。この人は。

私は、頭が真っ白になつて、何も言えなかつた。

そんな私を見て、先輩が溜息を吐く。そんなことさえ怖くて、私は肩を縮めた。

と。

「はあ……。あのさー、」

先輩が口を開いた。私は、静かに顔をあげてそちらを見る。

何か、言われるんだろうか。

怖くて唇を噛んでいると。

「俺、お前のこと嫌いだわあ

予想もしなかった。
先輩に、そんなことを言われるなんて。

「俺、お前のこと嫌いだわあ」

校内一の人気者の先輩に初めて言われた言葉は、その一言だつた。人に嫌われるのは、嫌だ。でもそれは、嫌いでも好きでもない人のみのこと。

私は今、初めて、率直に「嫌い」と言われた。真正面から、剛速球で。

前も言ったように、私はこの人が苦手だ。もしかしたら、嫌いなのかもしれない。そんなあやふやな位置に、先輩はいた。

そんな嫌いな人に「嫌い」と言われても、なんとも思わないだろう。少なくとも、私はそうだ。

何か、言い返したかった。

でも、思つてていることが言葉になつて出でこない。いつもと同じ。何もできなくて、私は、俯いた。

そんな私を見て、先輩は溜息を吐く。それが怖かった。

先輩はきっと、私をおいてどこかへ行くだろう。ていうか、行つてほしい。今すぐに。私の心臓が限界だ。膝だつて、さつきから震えている。

そんなことを考えていると。

「お前さー……」
「つ、ー。」

先輩が私の顔を掴んで、強引に前を向かせた。先輩の力が強くて、掴まれている部分が痛い。でも、今はそんなのどうでもいい。私は今、恐怖で動けないでいた。みんな、笑うだろう。こんなことで動けなくなるなんて。別に、笑われてもいい。怖いものは怖いのだから

ら。頑張らなければ、克服できないものだつてある。

視界が震んでいく。止まつた涙が、また出てきそつだ。

しかし、そんな私にかまわず、先輩は私の顔を掴んだまま、見つめてくる。

どうにもできなくて、私は、必死に先輩から目を逸らした。そう、熊と遭遇したときのようだ。

怖い…………つー！

そう思つてみると、先輩が、やつと口を開いた。

「なんで自分の思つてること言わねえんだよ」

「う言われると、わかつていて。だいたい、予想はつく。さつきのような場面に出くわしたとき、半分の人は「虜めか」、もう半分の人は「自分の考えが言えないのだろう」と思つだらう。これがあつてはいるかはわからないけど。

私の予想では、先輩は絶対に、後者だつた。何があつうと、絶対に。

だから、言わることはわかつていて。

でも、実際に言わると、感覚が違つた。それも、全然。

この質問に、私はどう答えればいいのだろう。それ以前に、答える勇気が、私にはない。

ずっと黙つてはいる私を見て、先輩は、諦めたような顔をした。答えない、とわかつたのだろうか？

顔から手が離れて、私は少し安心する。あの妙な緊張感から、少しだけ放された。

と。

「俺、お前みたいな奴が一番嫌いなんだよな」
先輩が、急にこんなことを言い出した。

「…………」

「お前みたいな弱虫が、大嫌いなんだよ」

「……っ、」

先輩の言葉に、カチンときた。本当は、殴つてやりたい。それく
らい、私は悔しかつた。

でも、本当のことだからしじうがない。手は出せない。
ぎゅっと、拳を握つて俯いた。

「こう言われたって、言い返せねえ。なんなんだよ、お前
「……」

「普通なら、本当のことでも何か言い返すと思つぞ」

そうとだけ言つて、先輩はどこかに行つた。

緊張の糸が切れて、強張つていた筋肉が緩む。そのせいで、私は
その場にへたれこんでしまつた。

上手く動かない頭で、さつきの先輩の言葉を思い出す。

『弱虫が大嫌いなんだよ』

そう、私は弱虫だ。何も言い返せない。自分の考えが言えない。
すぐに泣いて、怖くなる。
誰よりも弱虫だ。

『大嫌い』

嫌いな人に言われたのに、胸が痛むのはどうして？

『大嫌い』

『門先輩にそう言われてから、数日が経つた。

私は、あの日から何かがおかしかった。

気づくと先輩のことを考えていて、先輩を見ると、なぜ胸が痛くなる。どれもこれも、先輩絡みにことだ。

それでもやっぱり弱気なことには全く変わりなくて、パシられてばかりだ。でも、先輩のことがあってから、前よりパシリの数が少なくなった。それと同時に、少し、周りの視線が冷たくなった。

私は、パシリの回数が少なくなったことなんて、全然嬉しくなかつた。周りの視線が、辛くなつただけだつた。

だから、先輩のことがさらに嫌いになつた。

だから、どんどん人が離れていく。私は何もしていないのに。

どうして私を責めてくるの？

どうして私から離れていくの？

私が先輩に助けてもらつてから、私は、今までになかった嫌がらせを受けるようになつた。それも、かなり陰湿なものだつた。

仕事を更に押し付けてくるようになつたし、わざとぶつかつてきたのに「謝れ」と言われて謝らせられたり。

自分の意見が言えない私は、相手にとつて、格好的だつた。先生に言いつけることもない。反抗もしてこない。虐めるにはうつつけ。

私は、泣くだけで何もできなかつた。ただ、泣いてうずくまるだけ。

け。先生に言えば、更に酷くなる。それが、とても怖かつた。

いじめは、体に痕が残らないようなものばかりだった。なぜ人は、

こうこうとひろで知恵がはたらくのだろうか。

隠された靴を探しながら私は、そんなことをぼんやりと思つてい
た。

靴は、一足ともなかつた。きっと、一足ずつ別々のところに隠してあるのだろう。今は放課後だから、校内に人は少ない。だから、探していても見つからないだろう。

もしかつたら、靴下で帰ろうか。それとも、上履きのまま帰ろうか。見栄えは悪いが、上履きを履いて帰つたほうがいいだろう。そうすれば、足の裏は汚れない。そうだ。そうしよう。

た。これは、拾ったほうがいいだろう。

10

「つ、おい！」

急に肩を掴まれて、上半身を起させられる。突然の「」とにびつくりして、私は声を上げそうになる。 けどそれは、後ろから出できた手によつて出ることはなかつた。

— hu hu — ! hu — — — — ! ! !

強く押し付けられて息ができず、私は、恐怖も忘れて手を叩いた。

「静かにしろ！図書室だぞ！」

もがいていると、耳元で、聞いたことのある声がした。小声だけ
ど、必死な感じがとても伝わるような声だ。

その言葉に、私はハッとした。

そうだ。ここは図書室だ。静かにしないと。
私が落ち着くと、後ろの人は、「出るぞ」と言って、私の手を引

いた。

「はあ……。ヒヤヒヤしたぜ……」

図書室から出て、私の後ろにいた人の正体がやつとわかった。

「ぐ、柵先輩……」

そう。

私の大嫌いな、柵先輩だった。

「な、なんで……、」

「お前はなあ……」

私の言葉をさえぎって、先輩が溜息交じりに何かを言い始めた。
なんだろう、と思つて、先輩の様子を見ていると、頭を小突かれ
た。

「いたつ」

「なんつー格好をしてんだよ！ 馬鹿かお前はー！」

急にそんなことを言われても、困るんだけど……。

私は、何がなんなのか状況が把握できないでいた。

そんな私を見て、先輩がまた溜息を吐く。

「お前なあ……。後少しでパンツ丸見えだつたぞ」

「……………つ、！？！？」

先輩の口から出た言葉を理解するのに、私は、数十秒かかった。
理解した途端、顔が一気に熱くなつた。きっと、私の顔は真つ赤
だろう。

「だから、完全に見える前に」

「見たんですか……」

「あ？…………まあ、その、少しな……。てか、見えただけでつ、」

「……………」

「……？ おい、どうし」

「最低です…………」

「……………」

「なつ、」

私はそつとだけ言つて、その場から走り去つた。
見られた。大嫌いな先輩に見られた。最悪だ。
恥ずかしさと悔しさで、涙が出てきた。

もう、あの人の顔を見たくない。
本気でそう思った。

「…………なんで俺が泣かしたみたいになつてんだよ……」

その場に残された少年は、そつと言つて、小さく舌打ちをした。

05・名前を知らない優しい先輩

「**門先輩**に下着を見られた。最悪だ。先輩は親切のつもりかもしれないが、私にとっては、大きなお世話だつた。門先輩に見られるくらいなら、他の人に見られたほうがまだよかつた。

あの場にいるのが堪らなくなつた私は、あそこから走つて逃げ出した。

やつと逃げられた……。

そう思つたとき、私は、重要なことを思い出した。

靴！

そうだ。私は靴を探していたんだ。あんなことがあつたせいで、すっかり忘れていた。

どうしよう。靴を探さなければ、上履きで帰ることになる。私は別にかまわないけど、親がびっくりするだろつ。やつぱり、探して帰らなければ。

溜息をついて、廊下を振り返る。

今戻つていつたら、先輩と遭遇してしまうだろう。それは、なんとしても避けたい。あんなことがあつたばかりだから、それは先輩も同じだらうけど。

しようがない。1階から探していくしかない。

もう一度溜息をついて、前に向き直つたとき。

「あ、いたいた」

向かいから来た誰かと目が合つた。目が合つた人は、一言、そう

零す。

誰だらつか。あまり見かけない人で、私は普段より警戒心を強める。内心、かなりおどおどしている。それが表に出な^こよ^うに、私は必死だった。

そんな私に、その人は近寄ってきた。上履きの色からして、先輩だった。それも、^{あとずさ}門先輩と同じ学年だ。

最悪だ。先輩は、ただでさえ苦手なのに。あまり見かけない人なんて。

泣きそうだ。どうしよう。

きつと涙目だ。そう思った私は、俯いた。

「なあ、この靴、お前のだよな？」

先輩は、そう言いながら私の靴を差し出してきた。それにビックリして、思わず顔を上げてしまった。

「う、な、なんで、わたしの……、つ」

「これ、俺の教室のゴミ箱に入つてたんだよ」

その言葉に、ああ、やっぱりと思つてしまつた。

先輩が差し出した靴を受け取るために手を伸ばすと。

「なあ、なんか辛い」とでもあつたか？」

先輩が聞いてきた。急になんだろう。そう思つたとき。

「泣いてるぞ」

そう言つて、先輩が指で私の涙をすくつた。

少しふっくりして後退つてしまつた。

マズイ、怒られるかもしけない。どうしよう。

そう思つてぎゅっと目を瞑ると。

「ああ、「ごめん。ビックリしたよな。」「ごめん、」「ごめん」

先輩は、私の頭を撫でてきた。

今までにないパターンに、私はきょとんとして、先輩の顔を凝視してしまつた。

そんな私を見て、先輩は「どうした？」と笑つて聞いてきた。

顔が熱くなる。

鼓動が早くなる。

こんな感覺は、初めてだつた。

なんだろう、これは。いつもの、緊張とかとは違う何か。初めての感覺に混乱していると、先輩が私に話しかけてきた。

「三神 慧だよな、お前」

「えつ、あ、はつ、はい、そりです……つ、」

なんででしょう…、そう問うと先輩は、「いや、とくに何も」と、何か濁したような言い方で答えた。

なんだろう？

といふか、先輩はどうして私の名前を知つているんだろう？

そういうふうに先輩はなんていう名前なんだろう？

ひとつのはずが、ひとつはちがう。私はどうすればいいんだらう。

軽くパーティクになつていると、先輩が口を開いた。

「俺でよかつたら、いつでも相談にのつてやるからさ」

そう言いながら先輩は、私の頭に手をおいて微笑んだ。

「一人で抱え込むなよな」

名前も知らない先輩に

胸が高鳴る

この気持ちはなんですか？

親切な先輩は、帰り際に、笑いながら私に手を振ってくれた。

親切な先輩に会った翌日。私は、いつもの如く、パシリをさせられていた。今回のパシリは、授業で使う大量の資料を教室へ持つて行くものだつた。職員室から教室までは、結構な距離があるため、大量の資料はキツかつた。

でも私は自分の気持ちを人に言えない。いつものように、押し付けられて、何も言えなかつた。すれ違う人たちとは、私に見向きもしないで通つっていく。まるで、私がそこにいなかのように、自然に。

『手伝つて』

そう言いたいとは思つてゐる。でも、言えないのだ。いつ資料を落とすか、ヒヤヒヤしながら私は階段をのぼつていた。そんなとき、何人かの先輩たちが下つてきた。私は、道を開けようとして横に避けよつとした。

刹那。

「あ……っ」

階段から、後ろに落つこちた。

人間というものは、自分の身に危険が迫つたとき、いつもより時間の過ぎ方が遅くなるらしい。スパースローで映像を見ていのうな、そんな感覚。

私は、今まさに、その状態だつた。

資料が落ちてくる

先輩たちはあっけにとらわれている

足が階段から離れていく

宙に浮いた状態で、私はゆっくりと皿をつむいで思つ。

『どうして、いつもちやつたのかな

そのまま私は、意識を手放した。

休み時間。俺は最高にイラついていた。

そう。アイツ、三神 慧のせいだ。

昨日、俺は図書室で、アイツの、…………、し、下着を見てしまつた。

別に、俺が見たくて見たわけではない。たまたま見えてしまつただけだ。アイツの下着を見るなんて、こっちから狙い下げだつつの。

それなのに、アイツは泣いて帰つちまつた。

まるで俺が泣かせたみたいになつて、本当に氣分が悪かつた。氣分が悪いのは、今もなのだが。

そんな俺に、誰かが近寄つてきた。誰だ。今の俺に近づくなんつー、自殺行為をする奴は。蹴り殺すぞ。そう思つてガンくれてやると、見慣れた顔が、いつもと同じ調子で言葉を零した。

「おいおい瑞紀。いきなりガンとばしてくるたあ、なんだよ。俺がなんかしたつてか？」

「なんだ、テメエか。高峰」

俺に近寄つてきたのは、幼馴染の高峰

たかみね
響平

だつた。

コイツは、昔から俺の一番の親友であり、大切な幼馴染だ。

「おいおい、いつも言つてるじゃねえか。苗字で呼ぶなつてやー」「うるせえよ。高峰は高峰なんだから高峰でいいだろ」「高峰つて連呼すんなよ。なんか違和感あるからやめや。やんでいいからよ」

「それは絶対に嫌だな」

「え、なんでだよ」

高峰はこういう面白い奴だから、友達が多い。俺に友達が少ないというワケじゃない。高峰は、他の学年や女子、教師たちとも普通に親しいのだ。

一緒にいて楽しい。やつ思えるヤツが一人でもいるといいと、俺は思う。なんでも言える。そんなヤツ。

アイツは、そういうヤツがいないのだろう。普段の行動を見ていると、いかにも、『私には友達がいません』ってオーラが出ているのだ。一人で寂しいヤツ。

俺は、そういう弱虫が大嫌いだ。

自分の考えが言えないで、うじうじしていて。見てもどかしい上、付き合いにくいのだ。俺は、高峰みたいなさつぱりしたヤツが好きだ。

そう思つていると、高峰が何かを思い出したように、口を開いた。

「そうだ、そうだ。昨日さ、三神と話したぞ」

「…………マジかよ」

「おう」

今、飲み物を飲んでいたら、絶対に噴き出していただろう。

なんで高峰とアイツが話したんだ？

「お前、アイツになんか用があつたのか…………？」

「ん？ ああ、まーな。昨日、教室の『ミミ箱』に三神の靴が入つてさ。探してるだらうなーつて思つて、届けようとしたんだよ。そしたらさ、俺の向かいから三神が、来たんだよ。なんか知らねえけど、三神、泣いてたんだよな」

「うつ」

高峰の言葉に、俺はギクつとする。思わず、短い嗚咽のよくな声が洩れてしまった。

「？ どうした瑞紀？」

「い、いや……。なんでもねえ……」

「…………おい、瑞紀。顔が引きつってるぞ。お前、なんか知つてるだろ」

サイアクだ。

「昨日、三神となんかあつただろ

「し、知らねえよ……」

シラを切るつもりが、墓穴を掘ってしまった。

高峰が俺に問い合わせてきて、もう逃げ切れないと思った、そのと

れ。

「一年生の女子が階段から落ちたぞ……」

うちのクラスの奴が、大声で言つた。

その言葉に、教室は一瞬静まり、次の瞬間には、色々な声が溢れ出した。

「落ちたつて……、高いところだつたらマズくねえか？」

「ああ。後ろからだつたら、尚更だな」

しかし、誰だソイツは。

そんな俺の考えを察したのか、高峰が大声を出しながら入ってきた奴に聞いた。

「おい、それ誰だ？」

その問いに、ソイツは首を傾げた。

が。

「一年三組、三神 慧よ

教室の後ろのほうから、聞き取りやすい通つた声がした。

全員、一斉にそちらを向く。

そこには、ロッカーの上に足を組んで座つた、一人の女子がいた。

初鹿野 涼

セミロングより少し短い黒髪。色白の美人だ。

見た目はとてもよろしいのだが、中身は非常に残念な、少し……、いや、かなり変わった奴だ。

オタクな上に、腐女子。行動もおかしいコイツは、校内でも浮いていた。

しかし、コイツは裏で情報屋をやっている。コイツは、どんな情報でも容易く手に入れてしまう。それを厳重に管理し、客に必要な情報だけ売る。売る情報にも気をつけて、相手に売ると自分が不利になるような情報は、絶対に洩らさない。

このような情報屋以外にも、初鹿野は、裏で色々なことをやっていふ。

とにかく、謎が多くすぎる奴だ。

「職員室から教室へ資料を運んでいる途中、下つてきた先輩に道を譲ろうと横に避けようとして足を踏み外して、後ろに落ちた。後頭部強打。脳震盪・右腕骨折。そのまま病院へ」
後遺症が残らないといいけどね。

初鹿野の言葉が、体に響く。

三神が階段から落ちた。

アイツのことはどうでもいいはずだ。

なのに、この動悸はなんなんだ。

この日、俺は一切、授業に集中できなかつた。

目が覚めると、真っ先に、白い天井が目に入った。

何があつたのだろうと、記憶をたどつてみる。

いつものようにパシリにされて、教室に行く途中で……。

そうだ。階段から落ちたんだ。

ひとつのことと思い出すと、序々に記憶が戻つていった。
きっと、ここは病院だろう。頭が痛い。右腕に違和感がある。
色々と確認したいことはあるが、体中が痛くて、今は何動きたく
なかつた。

数分後、部屋に入つてきた看護婦さんが、私に気づいて、慌てて
先生を呼びに行つた。

私の隣には、誰もいない。

父も、母も、親戚も。誰もいない。

私には、父も母もいる。当然、親戚もだ。
でも、両親は仕事のことばかり。親戚はみんな県外。

私の親は昔から、実の娘である私に、見向きもしなかつた。

2人が大切にするのは、社会的地位と権力、お金だけだった。
父も母も、お互いに口をきかない。話すのは、必要最低限なこと
だけだった。離婚をしたわけじゃない。同じ家に住んでいるし、結
婚式も挙げたそうだ。

なのに、夫婦らしいところが、全くと言つていいほどなかつた。

些細な喧嘩も、笑顔も、会話も。

あるいは、お金の取引と仕事の話。

私の家庭には、一般家庭にあるものが何もなかつた。

家族団らんの食事も、家族で旅行も、親子喧嘩も、

会話も。

話はする。でも、会話はしなかつた。

ただ、自分の言いたいことを言つてるだけ。

最初のころは、どうして2人が会話をしないのか、不思議でたらなかつた。でも、そのころから引っ込み思案だつた私は、それを聞くことができなかつた。

でも、今ならどうしてかわかる。

2人の間には、愛がないのだ。

人を愛する気持ちがないから、こうなつたのだろう。
だから、娘の私にも見向きしない。

小・中学校での授業参観に、私の親は、一度も来なかつた。
運動会にも、学園祭にも

入学式や卒業式でさえ

いつの間にか、親に対する私の『悲しみ』の感覚は麻痺していた。
だから、これが当たり前だった。

そんなことをぼんやりと考えていると、先生が来た。

「三神さん、どこか動かなかつたりはしますか？」

その言葉に首を振る。

「何か見えなかつたり、聞こえなかつたりは？」

「いえ、大丈夫です……」

先生は、しばらく私の目などを診てから言った。

「いやあ、よかつたよ。後遺症もないみたいだし。落ちたときに、脳震盪を起こしてね。後遺症がなくてよかつた。まあ、右腕と左足首、右足を骨折したけどね。全身強打したから、体は痛むだろうけど、じきに治るよ。ああ、一ヶ月は確実に入院だよ。左足首は大丈夫だけど、右足と右腕の骨折が酷くてね。右足が治るころには、右腕も少しはよくなっているだろうけど。それまでは入院ね」

「…………はい……」

先生の言葉を聞いて、少しだけ気が楽になった。いじめられない。
そう思つてゐると、

「親に連絡はしたよ。仕事が忙しいから、来れないらしいけどね」
娘がこんな状態なのにねえ……。

先生が零す。

私は、なんとも思わなかつた。それが『普通』だから。

の人たちは、私のことをなんとも思つていないだろう。

私は、の人たちにとつては人形のようなものなのだから。

先生が部屋から出て行つて、数十分後。ドアをノックする音が聞こえてきた。

返事をして、入つてきた人たちの顔を見て、私はビックリした。

「…………く、ぬぎ先輩…………、！」

そう。櫛先輩だった。

それだけでも驚いているのに、その後ろから姿を現した先輩に、更に驚く。

「あつ、あのときの…………」

昨日の親切な先輩がいたのだ。

「よ、三神」

あのときと同じ、無邪気な笑顔で私に声をかけてくれた。心成しか、顔が熱い気がする。いや、そんなことより。

「あ、あの、どうしてここに…………、！」

そう。どうして先輩が…………、櫛先輩までここに来たのかが問題だ。先輩たちは、私とは直接関わりがあるわけではないのに。そう聞く私に、先輩が答えた。

「心配になつたからに決まつてるじゃんか」

「！」

「まつ、瑞紀はそつでもねえみたいだけどな」

「ケツ。強制的に連れてきた奴が何言つてやがる」

見たところ、2人は仲がいいようだ。

そんな2人を見て真つ先の思うことは、どうしていつも違いがあるのだろうか、ということだった。そう思つてはいるが、また誰かが入つてきた。今度は、見たことのない先輩だった。

「どーも、慧ちゃん。怪我、大丈夫じゃなさそうね。まあ、脳に影響がなくてよかつたんじゃない？」

「気さくそうな人だ。とても美人で、明るそう。私とは正反対の人。でも、どうして私の名前を知っているのだろうか？」

「ああ、そういえば、初めましてだつたわね。あたしは初鹿野涼^{りょう}。」

「一年一組よ」

「あ。俺も自己紹介してねえ」

初鹿野先輩の言葉に、先輩が気づいた。

「俺は、高峰 韶平。初鹿野と瑞紀と同じクラスだ。よろしくな」

「あ、はい……っ」

高峰先輩が笑いながら言つ。

「それにしても、あの情報は本当だつたのね……」

部屋を見て、初鹿野先輩が一言呟く。あの情報つて、なんのこと

だろうか？

そう思うが、私は気にしなかつた。

「なあ、三神。お前、入院すんだろ？」

「あ、は、はい……」

「必要なモンとか、親は持つてきてねえのか？」

その言葉を聞いた瞬間、初鹿野先輩が舌打ちをした。そのことに驚く間もなく、初鹿野先輩が目にも留まらぬ速さで、高峰先輩の鳩尾に右ストレートを叩き込んだ。

一瞬のことでの、柵先輩も私も、拳を叩き込まれた高峰先輩でさえ、呆気にとられた。

しかし、高峰先輩はすぐに自分の状態に気づき、その場につづくまる。

高峰先輩をそんな状態にした初鹿野先輩は、何事もなかつたかのように振る舞つてゐる。

さすがにこれには、柵先輩も眉をひそめていた。

「慧ちゃん、なんならあたしたちが持つてきてあげるわよ？」

「えつ、でも、悪いですしつつ、」

「だーいじょぶ、大丈夫。お金盗んだり、物盗んだりはしないわ。場所さえ教えてくれれば、準備してきてあげるから」

先輩の言葉に、私は思つ。

今、両親は仕事で忙しいため、当分帰つてこないだらう。だから、初鹿野先輩たちが上がつても問題はない。それに、この人たちは、絶対に盗みなどはしない。

だけど、先輩たちに悪い気がする。

そう戸惑つていると、初鹿野先輩が言つた。

「あたしたちのことは気にしなくていいのよ。あたしたちが好きでやつてるだけだしね。だから、ドーンと任せちゃつて」

そう言われて、なぜか安心した。なぜかはわからないけど、とても。

「じゃ、じゃあお願いします……。えと、そのカバンの中に鍵が入つてます」

「ん、これか?」

「あ、はい。そうです……」

痛みから復活した高峰先輩が、鍵を取り出す。

「慧ちゃん、服とか、どこに入つてるか、教えてくれる?」

「は、はい……」

先輩に場所を告げていく。

数分後、準備が整い、高峰先輩と初鹿野先輩は、私の家に向かつていつた。

病室には、私と門先輩の2人だけ。

ものすごく、きまづい。

とてもいたたまれない空気が充満していた。

しかし、そんな空気を改善できるわけでもなく、先輩と私は、一時間、ずっと黙つたままだつた。

08 · 病室（後書き）

高峰くんと涼ちゃんのコンビが個人的に好きすぎる。 櫻くんと高峰くんは、両方好き。三神ちゃんも大好き。 結局のところみんな好き。

「三神つて可愛いよな」

「ブツ」

いつも通りの昼休み。

俺が、購買で買ったパックの麦茶を飲んでいると、高峰が一言零した。その言葉に、俺は飲んでいた麦茶を噴き出してしまった。それを見た周りの奴らが驚いている。

「きつたねえな、瑞紀い。俺の弁当にかかつたりビリしててくれたんだよ」

「す、スマン……、じゃねえ！ 俺のせいじゃねえだろ！ がテメエ！ 誰のせいで俺が噴き出したと思つてんだアホ！！」

高峰の言葉にキレる。俺は何も悪くない。何も悪くないんだ。「知らねえよ。俺は思ったことそのまま言つただけだし。なんでキレられなきゃいけねえんだよ。なんだ、逆ギレか？ キレる10代つてか？」

「蹴り殺すぞバカ峰」

「は！？ なんだバカ峰つて！ テメエにバカつて言われたかねえよアホ瑞紀！」

「誰がアホだあ？」

言い返されて、更にイラつときた俺は、挑発してやつた。

俺の言葉に、高峰がニヤつと笑つて言つた。

「お前だよ、お・ま・え！ んなこともわからなくなつちまつたか？ 幼稚園からやりなおせバーカ！」

「ああ？ じやあテメエは動物園だな！ 上 動物園にでも送られ

ちまえ！」

「ハツ。お前は旭 動物園でペンギンと空飛んでるー。」

俺たちの言い争いにつけていけない周りの奴らが困っている。しかし、そんなことは気にしてない。互いのクズのようなプライドを傷つけないために、俺らは叫んで叫んでを続ける。

「うつせえ馬鹿ー！」

「つんだと、間抜けー！」

ここまで喧嘩も、最高潮にたつした。俺らは、手を上げる。互いの顔面を殴りあつまで、ほんの2秒ほどしかなかつた。なのに。

「何小学生みたいな喧嘩してるの、よつ

「つー？」

俺たちの拳を、初鹿野が名前とおり、涼しい顔で受け止めた。

「んなつ、手エどける、初鹿野！」

「そりだ！ 俺たちのプライドをかけた戦いなんだ！」

拳を引っ込めようとも、初鹿野に強く握られているせいでの、それは叶わない。コイツ、本当に女なのか……！？

「何がプライドよ。アンタらのプライドなんて、生ゴミ同然でしょ。そんなもん賭けて何になんのよ

「なつ、生ゴミーつー？」

「お前、生ゴミは肥料になるんだぞーー。生ゴミ馬鹿にすんじゃねえー！」

「そりだぞー！」

俺たちは一体、何を言っているんだろつか。言い返すとこりが違う気がする感が否めないのはなぜだ……！？

そんな俺たちを、初鹿野は呆れたような眼差しで見てくる。

「何言つてんのよ……。とにかく、わざとやめなさい。じゃないと、」

「 「 「 ！」 ！」

初鹿野が俺たちの手を放したと思つたら、後頭部をつかまれ、高峰の頭を俺の頭にぶつけた。

その場に、ゴシン！… といつ鈍い音が響く。

「今みたいに、酷い目に遭つわよ」

初鹿野が言つ。もうすでに酷い目に遭つていいのだが……。つ。ぶつけられたところから衝撃が広がつてこき、クラククラと眩暈がした。

脳が揺れている感じがする。気持ち悪い。

高峰は高峰で、額を押さえながら、「うああああー…………つ」やら、「ふぬあああー…………」などとわけのわからない声をあげている。

「あたしから見れば、アンタらは「キブリ以下ね」

クククッ、と、いかにも悪役のように初鹿野が笑つた。ムカつくが、顔がいい初鹿野は、その笑いかたがまたかっこよく見えた。

「で、なんの話してたのよ？ あたしも入れてほしいわね

「ああ。三神は可愛いよなつていう話だ」

初鹿野に高峰が言つ。

その言葉を聞いて、また麦茶を噴き出しそうになる。が、初鹿野に殴られるのはまつぴらなので、なんとかこらえる。

「……ゴホッ…、高峰、お前眼科行つたほうがいいぜ

「は？ 行つたほうがいいのは瑞紀のほうだろ。三神のどじが可愛いんじゃないんだよ」

「そうね。櫛は国立病院の眼科に行つたほうがいいと思つわ

「おい初鹿野。お前、今サラッと酷いことを言つたよな

ポーカーフェイスです」いことを言つ初鹿野に、俺はなぜか、いつも以上に冷静だつた。おかしいだろ、俺。

「当然のことを言つたまでよ。どうせなら眼球の移植手術でもしてもらえば？ いい医者を紹介してあげるわよ。アンタのために、こ

の情報はタダにしてあげるから

「いらん世話だ！ そういうとこりで情報をタダにするな馬鹿！」

「何よ。タダにするだけじゃ満足いかないっての？ 風流な奴ね…

…。しょうがないから、すぐ視力のいい目玉にしてつて頼んであげるわよ」

「いらねえよ！ このままでいいわアホ！！」

キレる俺に、初鹿野が舌打ちをした。なんで俺が悪いみたいになつてんだよ。わけがわからん。

そんなこと思いつつ、会話を続ける。

「…あんて急にそんなこと言い出すんだよ、高峰」

「え？ いや、三神が入学してきてからずっと思つてたんだけどよ。最近よく思うようになったから、言つてみた。ま、お前は三神が嫌いみたいだけだな」

「…………んなの、つたりまえだろ…………。ああいうウジウジした奴、俺は大嫌いなんだよ…………」

俺は、眉根を寄せながら言つ。そう。俺は、アイツが大嫌いだ。だから、可愛いとも思わない。というか、なんとも思わない。

そんな俺を見て、高峰は苦笑する。

「じゃあ、質問をかえようじゃないか、柵くん」

「やめろ、苗字で呼ぶな。なんかきもちわりい」

「俺だつてそんな気分なんだよ、毎回毎回！」

俺の言葉に、高峰が怒鳴る。口イツに苗字で呼ばれると、じんましんが出そうになる。

「嫌いか好きかは別として。三神のこと、可愛いか可愛くないかだつたら、どっちだ？」

その質問に、一瞬、動作が止まつた。

三神が可愛いか、可愛くないか。そんなこと、考えたこともなかつた。

俺は、考え込む。

そして、ひとつ結論に辿りついた。

しかし。

「…………知るかよ、そんなこと」

「さうだけ言って、食べ終えたパンの「ゴリ」と麦茶のパックを持つて、俺は屋上に向かった。

「なつ、ちょ、瑞紀つ」

後ろからそんな声が聞こえてきたが、気にしないでそのまま進む。

三神が可愛いかななんて、知るか。んなもんに興味はねえんだよ。

さう思っている俺の顔は、なぜか少し、熱かつた。

「…………櫛って、ツンツンテレなのかしら…………」

「テメエは真剣なツラして何を言ひてやがる」

「あたしが思うにねー」

「無視かよ」

「櫛、慧ちゃんのこと、絶対に好きよ」

09・高峰の一言（後書き）

柄くんって、絶対にシンシンデレだ。最後のほうは、そんな考まで書いた。文句は一切受け付けないですよ。柄くんは何がどうなろうとシンシンデレなんだから！

「慧ちゃん、熱出したそつよ。39度の高熱」

ある日俺、高峰響平は、初鹿野からそんなことを聞いた。

俺の後輩、三神慧は先日階段から落下し、怪我をして入院している。

幼馴染の門瑞紀はなんとも思っていないようだが、俺は、心配でならなかつた。まあ、病院にいるから大丈夫だろうけど。初鹿野が言つたのは、ストレスから出た熱だそつだから、あまり問題はないそだ。

そう言われても心配だ。

俺はその日の放課後、部活を休んで、三神の見舞いに行つた。

最近、あまり見舞いに来なかつたから、三神に会つのは久しぶりだつた。

俺は、逸る気持ちを押さえつつ、病室に入った。

ドアを開けると、個室の割には広い部屋。ベッドに横たわる三神。なるべく音をたてぬように、部屋に入る。

三神は寝ていた。熱が高いせいでの、彼女の顔は赤く、苦しそうに歪められていた。

俺は、三神の頬に触れた。熱い。それも、すこしく。

彼女を起こさせぬように綺麗な茶髪を梳ぐ。しばらぐそうしていると、三神が少しだけ、身をよじった。それにびっくりして、俺はすぐ手を引っ込める。三神は、くぐもった声を漏らしてだけで、起きなかつた。安心して、溜息をつく。

しばらぐ三神の顔を見ていると、なんとも言えない衝動に駆られた。

そして

俺は、三神の額にキスをした。

数秒後、ゆっくりと唇を離し、自分の行動に我に返る。誰も見ていなかつたものの、恥ずかしさが込みあげてきて、俺は病室からそそくさと出た。

俺は何をしてるんだよ……つー

真っ赤であるうつ顔を右手で隠しながら外へと出た。

と。

「なんでテメエは顔が赤いんだよ」

「…………つづつ……!? ! ? ! ? !

「いや、そんなに驚かなくていいだろうがよ…………」

入り口のすぐ横に、瑞紀がいた。

俺の顔を見た瑞紀がそんなことを言つてきたもんだから、瑞紀がいたことより、指摘されたことに驚いた。

「みつ、みみみみみ瑞紀！ お前なんでこりこりいんだよつー」

「…………お前の様子を見に来ただけだよ…………てか、なんで顔赤いんだよ。テメエも熱か」

「ち、ちげえしつ。俺の様子って、本当はお前も三神の」と心配で来たんだろう

「は、はあっ！？ んで俺がアイツの心配なんてしなきゃなんねえんだよ！ ふざけんなバカ峰！」

「…………ああ、そつか…………」

「おい待て。なんだその、『じょうがねえからそういうことにしてやるよ』みたいな視線は

「ソんなコトナイぜ？」

「なんで片言なんだよ！ お前、絶対に……」

何かと言つてくる瑞紀を無視しつつ、俺は思つ。

あのことは、口が裂けても言えねえな…………。

昨日の夕方。

三神の見舞いに行つた高峰を、病院の外で待つていたら、なぜか、高峰が赤い顔をして中から出てきた。理由を聞いても、高峰は顔を赤くして言葉を濁すだけだった。それに、どこか上の空な感じだ。初鹿野に聞けば、何か知つているだろうか？

いや、でも流石にそこまで

「そんなに驚かなくてもいいじゃないの」

なんたゞ、この前の高峰とのドジャウ感が否めない

いくぐる蝶のようだ。

「おおむね五日間で、ついでに

レジストリの構造を理解するには、まず各セクションの構成要素を理解する必要があります。

えてたから「コイツが寄ってきたのか。

そんなことを頭の片隅で考えているか今はものすくぐ強く

で、
？
げる。

「神出鬼没なのはまあ認めるけど、蟲つてじうにう」と、蟲つて

福島野が恐ろしいことを言いかけて何に思ね？ てかい声を上げてしまった。教室にいた全員が、こちらを向く。恥ずかしくなつて、机に突つ伏した。

「ふふふー。柵くぬぎのよわみ、あたしにむかひやーんと届いてるんだから。

「そちらへん、弁えておきなさいね」

「……サイアクだ……」

「なんとも言えない恥ずかしさと、よくわからないイライラが募る。そんな俺に気づいているであろう、俺の前にいる悪魔は言った。

「高峰のことも知ってるわよ?」

「つ、マジか!?」

その言葉を聞いて、俺は顔を上げる。

「当たり前じゃない。あたしの情報網に入ってるこない情報なんてないんだから。大抵のことは知ってるわよ。アンタの昨日の夕飯とかね」

「お前何だよ。盗撮でもしてるのか」

「違うわよ。まあ、法には触れてるだろ? けどねー」

「ちょっと待て。『コイツ今、恐ろしい』こと言つたぞ。」

今の発言を聞いて、俺は、『コイツには深く関わらなこよひじみうと、心中でそつと思つた。

いや、そんなことより。

「高峰のこと、教えてくれるか?」

「んー、そうねーえ。それなら、これで売つてあげないこともないわよ?」

そう言いながら、初鹿野が5本指を出す。『コイツの指一本の単位は、大体が万なのだ。万単位じゃない場合は、口で言つことが多いらしい。初鹿野が請求する金額が用意できない額と、噂では有名だった。

5本指とつこつとは、5万だらうか?

そう思つて、俺は初鹿野に聞く。

「5万、か?」

「いいえ。10万よ」

「そつちか!」

いや、どつちだよ、俺。

「んな額、準備できるわけねえだろ? が! 頭イカしてるだろ、お

前一。」

「お褒めの言葉ありがとう。アンタがいくら何と言おうと、額が上がるだけで下がることはないわよ」

それぐらい重要な情報なの。

初鹿野は、柄に合わない真剣な眼差しで言った。つまり、売るような情報じゃないのだろう。それか、その情報を漏らすと、初鹿野にとつて不利なことがあるのか。

「理由だけは、タダで教えてあげるわよ？」

「そこで金払えって言うなら、お前は人間失格だと思つぞ」

理由も情報の一環かもしぬないが、金を請求するのは、人間失格だ。

「なんとでも言いなさいな。アンタも知ってるでしょうけどね、あたしは、自分の不利になるような情報は絶対に漏らさないの。アンタは、今回もそうだと思つてるでしょうね。まあ、確かに間違つちやいないわよ。でもね、どちらかといつて、アンタと高峰のために言わないのよ」

は？

俺は、初鹿野の言葉に呆気にとらわれてしまった。

俺と高峰のためつて、どうこうことだよ？

「あたしから言えるようなことじやないもの」

初鹿野が口の端をくい、と少し上げながら言った。

そんのが、理由なのか？

さつきのイライラが、また酷くなつて、俺は怒鳴りかけた。

「ふざけんな、」

しかし。

「黙りなさい」

怒鳴りかけた俺を、初鹿野は鋭い声色で制した。今まで聞いたことのない声に、教室は静まつた。こちらを向いている顔たちの中に、高峰の顔もあつた。

「アンタは知らないでしょけどね、あたしがこいつやつて友好関係の情報を漏らさないのは、そんなにないことなのよ。どうでもいい馬鹿な野郎どもにだつたら、自分に不利にならない情報を売つてるわよ。今回情報を売らないのは、アンタらが本当に仲のいい奴等だからよ。あたしが売つた情報で、アンタたちの関係が崩れるなら、情報屋なんてやめてやるわー！」

そう言つ初鹿野は、怒りと悲しみが混じつたような、複雑な表情をしていた。

どうして、こんな顔をしているのか、今の俺には聞けなかつた。「まだ文句があるなら、いくらでも聞くわ。でも、絶対に情報は漏らさない」

さつきの声色と打つて変わつて、落ち着いた声で言つた。
俺は、「もうこい」と言つた。どうしようが、情報は売つてもられない。だから、諦めて、高峰に直接聞くことにした。

俺の言葉を聞くと、初鹿野は、「さつ」とだけ言つて、その場を去つてしまつた。

「おい、どうしたんだよ、お前ら」

初鹿野が去つた後、高峰が近寄つてきた。

「ちよつとな……」

お前が絡んでるんだよ、とは言へず」、俺は苦笑するしかできなかつた。

屋上に一人で立つ少女は、誰にでもなく、一言、言葉を零した。

「あんな光景は、もう絶対に見ないわ」

絶対に、絶対に見ない。見たくない。

ある日の廻上。

「高峰」

「んー？」

「聞いてるか」

「んー？」

「聞いてないか」

「んー？」

「テメエ殺すぞ」

「ぬおあつー？ すつ、スマン瑞紀ー なんだー！？」

高峰に何があつたか聞き出せりと想い、話しかける。しかし、全く聞いていない。上の空なのだ。
こんだから、聞き出しあつても聞き出せないので、どうしよう。

初鹿野にはこの前怒られた。なぜかはわからないが。まあ、最初から人の情報を売るなんてことはよくないから、普通なら、その判断は正しいだろう。でも、あの初鹿野が言わないなんて、一体アソツに何があつたんだろうか。
そんなことはさておき。

「お前、IJのまえからずっとおかしいや。何があつたんだよ。俺こそ言えねえことなのかな？」

高峰に聞いてみる。すると、「コイツはピクッと肩を揺らして、俺のほうを、引きつった顔で見てきた。

「い、いや、なんもねえよ…………？」

絶対にあるだろ。お前のその反応。そういえば、コイツは嘘をつくのが苦手だった。絶対に何かあつたのだ。

「嘘つくな。正直に言え」

俺の言葉に、高峰が俯く。そんなに言いたくないのだろうか。そう思つていると。

「瑞紀ちゃん、俺の話聞いて、何言つてもいいけどよ…………。絶対、他人には言つなよ…………？」

高峰が俺を、赤い顔で見てきた。

……。

「わかった」

「ほつ、ほんとかー？」

「ああ。だからよ…………」

「俺のこと、赤い顔しながら見上げるな。じゃないと…………、「

「高峰って受けなの！？ まさかの告白タイム！？ ボーカル同士でラブってるの！？ いいわね萌えるわ！！」

「初鹿野黙れ！ 気持ちワロイ」と囁いてんじやねえ……」
「コイツが来るから！」

初鹿野は、本当に神出鬼没だ。ありえないときで現れる。

「B」を侮辱したわね…… 全世界の腐女子とゲイに謝りなさこよ！
高峰とやりながら謝罪しなさこよ……」
「待て。最後のほうおかしかったわ。てか、全部おかしいぞ」「別にアンタが突っ込まれるまつでもこ「さ・け・ん・なつ……」

おかしなことを言い出す初鹿野の服の襟を掴む。「コイツが女なんて思いもしねえ。

「ちよっと、襟掴まないでよ。あんたのせいで服が伸びるでしょ」「知るか、んなこと！」「あ、おこ、瑞紀……」「」
「」のままコイツをブッ殺……」「今すぐ放さないと、アンタの田の前であたしがエロい格好した挙句、櫛強姦疑惑を流すわよ」「すいませんでした」

初鹿野が恐ろしい」と言い出したので、とつて手を放して土下座をした。そんな情報を流されでは困る。

「よひしい。じゃ、なんか大切な詰みたいだから、あたしはもう行くわね。おこしこ写メも撮れたし」「！」まつ、まさかテメェ、」「じゃあにーい」「

「なつ、初鹿野テメェ待てつ、おこ、ちよ、」「

ひらひらと手を振りながら、脱兎の如く逃げた初鹿野を、俺は追いつくことができなかつた。

しょうがない。今はそれより、高峰のほうが大事だ。

「で、なんだよ」

俺が向き直ると、高峰が言つてこくそうに口を開いた。

「俺さ……」

高峰の口から出た言葉が、俺はしばらく理解できなかつた。

『三神の「口」、キスしちまつた

別に、俺には関係ない。
アイツと高峰が何しようつと。

なのに、それを聞いて苛立つてゐる俺がいる。

どうしてなんだよ。

「なんだよ

俺の零した言葉に、高峰は顔を歪めてから、また俯いた。

病院から退院できた私、三神 慧は、まだ完治していない右腕を吊りながら学校に来た。

教室に入った瞬間、みんなからジロジロと見られた。その視線がいやで、私は必死に目をそらした。

久しぶりの自分の机。流石に、落書きはされていなかつた。そんなことしたら、虐めをしていると先生にバレるからだらう。やっぱり、人間はおかしなところで知恵が働く。

ボンヤリとそう思いつつ、私は席についた。なんとなく机の中に目をやると、紙が入つていた。何かと思って見てみると、そこには鉛筆で大きく、『お前なんか帰つてこなければよかつたのに』と書いてあつた。

紙を見たまま固まつて いる私のほうを、何人かの女子がクスクスと笑いながら見ていた。

きつと、これを書いたのはあの人たちだらう。

私のことを見ている子たちは、とても楽しそうだ。

性格が悪い。『ミミみたいな奴らだ。

そう思いつつ、私は自分が嫌になつた。

弱虫なくせに、どうしてこうすることは思えるのだろうか。思うくらいなら、言えばいいのに。

現に、そう思いながら私は泣きそうになつて いる。

弱い心。強気な考え方。

うまくバランスが取れていらないんだ。
心は弱いのに、考えは強気だなんて。

こんなより、完全に弱虫のほうが全然マシだ。
そうしたら、こんなに苦しまないのに。こんな余計な苦しみはないのに。

零れそうになる涙を拭つて、紙をぐしゃぐしゃと丸める。そして、制服のポケットに入れる。

家に帰つたら捨てよ。学校のゴミ箱じや、誰かに見られてしまうかもしれない。そうしたら、色々と面倒なことになる。それだけは勘弁だ。

そんなところに、先生が来た。

ああ、今日からまた、辛い生活が始まる。

午前中の授業が終わり、昼休みに入った。

教室は、他のクラスの子たちが来たりして賑やかだ。こんな中、一人でお弁当を食べるなんて嫌だ。

私は、教室から逃げるように出て、早足で校舎から出た。

屋上も賑やかだ。静かなところは、あそこだけだろ？。

入学してからすぐに見つけた、体育館裏の木陰。ジメジメと暗いわけでもなく、日差しが強いわけでもなく。丁度いいところ。

私は、ここが好きだった。

昼休みは、誰もいない。友達がいるんだから、わざわざこんなところに来るような捻くれた人はいないだろう。そう思いながら体育館の壁から顔を出すと。

そこには、私の信頼している、高峰先輩がいた。

びっくりして固まっている私。先輩のほうを凝視してしまって、視線に気づいた先輩と目が合う。

それに更にビックリして、大きな声を出してしまった。

「あつ、たつ、高峰せんぱつ、」
「三神」

そんなところで何してるんだよ。

高峰先輩が、少し驚きながら聞いてくる。
大きな声を出してしまったことが恥ずかしくて、小さな声しか出すことができなかつた。

私の答えが聞こえなかつたんだろう（当然か）。高峰先輩は、優しい笑みを浮かべながら「こつち来いよ」と言つてきた。
その笑顔がかっこよくて、熱い顔が更に熱くなる。

小走りで先輩のほうに行くと、「座れ」と言われた。
少しためらつたが、私はゆっくりと先輩の隣に腰を降ろした。

「弁当、食いに来たのか？」

「あ、はい……。一緒に食べる人、いないんで……」

そう言いながら、私は目を伏せて笑つた。

高峰先輩は、こんな私をどう思うのだろうか。

哀れむのだろうか。
蔑むのだろうか。

まだ。

人の考へてゐることに怯えている。

どうしてこうなんだろう。

そんなふうに、一人で色々思つてゐると、頭に手を置かれた。
それに少し驚いて顔を上げると、高峰先輩が笑つていた。

……？ 何を笑っているのだろうか？ 疑問に思つてゐると、高峰先輩が言つた。

「偶然だな。俺も一人なんだ」
だから、一緒に弁当食おうぜ。

その言葉に、私はまた驚いた。
「でつ、でも、せ、先輩、くつ、くねき 榎先輩と食べないんですか、……」
「？」

そう。先輩には、榎先輩がいる。
二人は幼馴染だそうだ。そうだ、といふのは、初鹿野先輩から聞いただけで、真相はよくわからないのだ。
でも、先輩たちはいつも一緒にいる。仲もとつてもいい。

友達でも、やつぱり違つ人と食べたりするのだろうか？
友達がいない私には、そこらへんは全くわからない。

私の言葉に、高峰先輩は顔を歪ませた。

……まずい。私、今何かマズイこと言つたかも……つ。
どうしよう。先輩、傷ついたかもしれない。人が傷つくようなことを言つてしまつた。

一人でマイナスな考えに埋まつてゐる私に、高峰先輩が言つた。

「おいおい。顔が真つ青だぞ、三神」
「せつ、先輩つ、わた、私先輩の気に障ることつ、」
「言つてねえよ。大丈夫だから泣くなつて」

そう言いながら、先輩が親指で私の涙を拭う。

大きなその手に、なぜか少しだけ安心した。それと同時に、脈を打つ速度が速くなる。

「す、すみません……」

「謝ることないだろ。あのな、こないだ瑞紀と喧嘩しちまつてわ……」

やつぱり私余計なこと言つた！

「せつ、せんぱつ、すみませつ、たし、つ」

「！？ いや、だから泣くなつて！ お前は何も言つてねえよ！ だから泣くな！」

急に大泣きしだした私に、高峰先輩が慌てる。

私があんな」と言えば、先輩が顔を歪めるのも当然だ。ああ、私の馬鹿…っ！

「で、でもつ、」

「大丈夫だから泣くなつて！ 泣かれると俺も困るから！」

その言葉に、ピタリと泣くのをやめる私。

そうだ。私が泣いてたら、先輩に迷惑だ。

ありもしないような気合で泣くのをやめる。

「…ぐす、…つすみません……」

「謝るなつて。大丈夫だから」

苦笑しながら言つ高峰先輩。

先輩に迷惑かけてばかりで、申し訳なくなる私。

先輩の顔を見るのが気まずくて、私は無言でお弁当を食べ始めた。

そんな私を見て、高峰先輩がまた話を始めた。

「俺、瑞紀と喧嘩……、いや、喧嘩でもないけどね。つよつと気まずくなっちゃったんだよ。まあ、俺のせいなんだけだな」「……？ 先輩たちも、そういうこと、あるんですか……？」
「そりや、しようじゅうあるよ。むつかやことじで、しようじゅう」「そういつ先輩の顔は、とても楽しそうで。その顔を見て、私も少し嬉しくなった。

高峰先輩は、笑つてゐるときが一番かっこいい。

無意識のうちにそんなこと思つてしまつて、恥ずかしくなる。そんな私に気づかず、先輩は話を続ける。

「そんでな。この前、俺、ちょっとマズイことやつちやつてさ。それ言つたら、瑞紀がちょっと機嫌損ねたつていづか…。それで、その日から気まずくて、話してないんだよ、アイツと」

マズイこと……？

高峰先輩は、そんなことしなさそうな人なのに。どちらかといつと、門先輩がしゃうだ。

いや、それより。

どうして高峰先輩がやつてしまつたことで門先輩が機嫌を損ねたのだろうか？

「せ、先輩、門先輩のお弁当、食べちゃつたりしたんですか……？」
私の質問に、先輩が吹き出す。

「三神は面白うこと言つなあー。違つよ。どつちかつーと、それは瑞紀がやつて俺が怒るほう。アイツ、俺の弁当よく盗むんだよ」
先輩の言葉に、私は恥ずかしくなった。ああ、もう。笑われた……。

「俺がやつたのは、そんなんじゃなくてさ。アイツの好きな子に、キスしちゃつたんだよ」

「……………！？！？！」

キス

聞き慣れないその単語に、一気に顔が熱くなる。今、私の顔は真っ赤だらり。

「まあ、キスつていつてもテコにだけどな」

クスつと笑う高峰先輩。

それでもやつぱりキスに変わりは無い。

「そ、それつて、あのつ、」

「ん？」

「せつ、先輩も、その人のことがつ、す、すすす、好きつて、ことですよ、ね……つ？」

私の言葉に、先輩は数秒固まつてから、急に顔を赤くした。
「えつ、！？ い、いや、まあ、その、な！ 好きじゃなかつたら、
さ、キスなんて、し、しないだろ、」
まあ、尤もな話だけ…。

そう思つていると、高峰先輩は立ち上がりつて言つた。

「わつ、悪い！ 用事思い出した！ 一人にしてごめん！ 俺戻る
な！」

「え、あ、はい、」

言い終わると、高峰先輩はすごい速さで走つていってしました。

……それにしても……。

「 欄先輩も、好きな人なんてできるんだ……」

そんな独り言を言った後に思った。

私の欄先輩のイメージって、好きな人なんてできないくらい極悪
非道な人だったんだな……。

高峰にあのことを聞いて、少ししてから三神が帰ってきて。
最近、俺はドタバタしつぱなし。あのことを聞いてから、高峰
との間には氣まずい空気が漂いつぱなしで、その上初鹿野も忙しい
ようで、全然話していない。

とにかく、簡単に言つてしまえば、最近の俺は不幸が続いてばかりで、
いじことが何もなかつた。

現に今だつて、授業に集中していなかつたせいで教師に怒られて
いる。

どうしてこんなに不幸が続くんだよ。なんだ。俺には災難の神様
が憑いてるのか？ いや、災難つて時点で神様ではないな。
説教をされながらそんなことを考えていて上の空だつたせいで、
また教師に怒られる。

ああ、考えてみればそうだ。アイツと関わりあつてからだ。

初鹿野に怒鳴られたのも、高峰と仲たがいしたのも、教師に怒ら
れてるのも、全部全部全部…………つ、！

「事の発端は全部、アイツの下着みてからじゃねえかよ……」

思い切り、思つていたことが口に出てしまつた。

教師は目を見開いてから、眉根を寄せて訝しげにこちらを見る。

初鹿野を除くクラスメイトたちは、こちらに驚きやら好奇やら、人
それぞれにいろんなことを思いながらこちらを見ている（ちなみに
初鹿野はニヤニヤしながら、男一人が絡み合つている表紙の本を読
んでいる。隣の席の奴がこちらを見つづ、初鹿野のほうを横目で引

きながら見ていろ)。

そんなことを思いつつ、はっと我に返つてから教師のまつを見る。
ああ、怒っているな。

第一声は決まつていてる。

「お前、誰の下着を見たんだ」

このことに触れない人間なんて、初鹿野とか、そいつた変わり者ぐらいだろう。変わった奴でも、触れてくる奴は触れてくるだろうが……。

いや、そんなことよりだ！

マズイことになつた。どうしてよりによつて、下着のことなんか言つてしまつた、俺！ もつと別のことがあつただろうが！

ああ、どう言い訳をすれば……。クソッ、初鹿野にうちを見ながら厭味つたらしい眼を向けてくんな！

落ち着け、俺。バスケあんなに素晴らしいに判断をつけたではないか。それをここで発揮すれば、なんとか危機は免れる……。よし！

「おい、門。お前、まさか女子の下着を……」

「いいえ。断じて違います。俺は女子なんかの下着に興味はありません」

ちょっと待て。

今のはおかしかつたぞ、俺。今のだと、まるで俺がホモだと勘違

いされるような言い方じゃねえかよ、オイ。

ああ、教師が哀れみを含んだ眼で見てくる。一部を除く女子たちが、とても残念そうな眼でこちらを見てくる。初鹿野あたりの腐った女子たちはとても嬉しそうな眼でこちらを見てているが……。男子なんか、前後でヒソヒソ話してゐしよ……。俺にそんな趣味はない……！ 決して……！

「…… 欄……」

「先生、違うんです。言い訳をさせてください」

「私はいいんだよ。それに、人にはそれぞれ価値観つてものがあるからな」

俺の話に一切聞く耳を持たずに、教師は話を続ける。

「価値観とかそういうのはいいから、とりあえず言い訳をさせてくれ……！」

「でもな、欄……」

「先生、あの、」

「私のパンツは、何があつても死守するからな……！」

「中年に興味はないんで安心してください先生」

すかさずツツコミを入れる俺。少し……いや、だいぶズレている気がするが、これだけはツツコんでおかないと今後の俺の青春に関わるんだ。

百億歩譲つてホモはいい。しかし、ホモでしかも中年が好きだなんて知れ渡つたら……！

「欄、今のは少し酷くないか？ 私は仮にも教師だし、即答なんて……」

「すいません。謝るんでそんな酷く傷ついたような顔で見ないでください」

その皺だらけの顔を殴りたくなるんで。

そう思つたが、最後のは言わないでおいた。当然だ。こんなこと言つたら、停学になるかもしれない。それは「めんだ。いや、でもこの醜いツラを殴れるなら、停学なんて安いもんか」。そんなことを思つてしまふ自分がいて、ああ、俺ももう末期か、なんてことを思つ。

こんな感じで、今日の授業は散々だった。その上、俺がホモだつた、なんていうあられもない仮説が立つてしまつた。そこらへんは初鹿野になんとかしてもらおう。金をとられるのは嫌だが、一生に一度しかない高校時代の青春をそんな仮説で潰されるなんて、堪つたもんじやない。

そんなことを考えながら廊下を歩いていると、目の前に何かが落ちていた。たぶん、教科書かノートだろう。近づいてよく見てみると、それはノートだつた。

ノートを拾つて、名前がないか見てみる。

そこには、女子特有の丸みを帯びた字で『1・3 三神 慧』と書かれていた。それを見て、思わず舌打ちをする。

コイツは、俺が最も嫌いな奴だ。そんな奴のノートを拾つてしまふなんて、最悪以外、なんと言えばいいのだろうか。

でも、アイツのノートがなんでこんなところに落ちているのだろうか。ふと顔を上げると、1年3組の文字が目に入った。ああ、教室が近くにあるなら、落ちても違和感はないな。

そう思いながら、ノートを開いてみると。

『学校に来るな』

表紙の裏側に、マジックでそう書かれていた。他にも、落書きがしてあつたり、ページが破つてあつたりしていた。いかにもイジメと見て取れるものだ。

よくページを見てみると、数式などが書いてあることから、数学用のノートだとわかった。

……アイツは……、

「何、してるんですか……っ、」

そう思いかけたとき、後ろから弱々しい声がした。

振り返るとそこには、案の定、右腕を吊つたアイツが立っていた。怯えたような、だけど怒りが混じつている顔をしながら。目には涙の膜が張っている。

「その、ノート……、私の、ですよ、ね……、」

「……ああ。……落ちてた」

小さい歩幅でひびり歩み寄つてくる三神。それを見たまま、俺は動かなかった。

「……、中、見たんですか……、っ、」

「ああ、見た」

俺の答えに、三神は涙の嵩を少し増やして、下唇を噛んだ。

「人の、ノートの中、勝手に見る、なんて…、最低、ですね……つ

「マイシは、ノートがどうなっているかわかっているから、こんなことを言つてのだろう。

「もう思ひながら立つてこいる俺に、三神が言つてきた。
「ノート、返して、ください。拾つてくれて、ありがとう、ペジ二
ました……、」

俺に言つてくる声は、震えていた。

これは、涙声なのだろうか。それとも、俺が怖くて、なのだろう
か。

まあ、どうひこしひ、

「まだ返すとは言つてねえ

「、つー。」

俺はノートを後ろに隠すようになした。すると、三神は驚いたよう
な顔をした。が、すぐに「返せ」とせがんでくる。
「返して、ください、」

「嫌だ」

「どうして、ですか……」

「これの中身見て、放つておく奴はいねえと思ひや」

その言葉に、三神の勢いが衰える。そして、口をつぐんだ。

「なんで、じんなの放つておくんだ

俺の質問に、三神は小声で言つ。

「……、先輩には、関係ない、でしょ?」

三神の言葉を聞いて、俺はまた言つた。

「教師や親には、言つたのか」

すると、三神がキツと、俺のほうを睨んできた。
そして、大声で言った。

「先輩には、関係ないじゃありませんかーー！」

それに、思わず俺は呆氣を取られてしまった。しかし、そんなことにかまわず、三神は話していく。

「先輩は、私のことが嫌いなんでしょう！ だつたら、尚更ですよ！ 私のことに、首突っ込んでこないでくださいーー。」

そう言われて、俺は、ずいぶんと前のこと思い出した。そうだ。『イツに初めて言つた言葉は、それだった。そんなこと、忘れたと思つたが、覚えていたのか。

「私がどうなつたつて、先輩はどうも思わないでしょうーー。」

その言葉を聞いて、俺の中で何がが切れた。
泣き叫んでいる三神の襟を引っつかむ。三神が怯えたような声を出したが、そんなのは無視だ。

今、重要なのは。

「馬鹿なこと言つてんじゃねえぞ、ビビリーー。」

三神が怯えているなんてことじやなくて、

「俺はどうも思わないかもしけねえけど、他の奴らはどうなんだーー。嘘めている奴を除いた、教師や、親や、」

「高峰と初鹿野の想いは、どうなつたまうんだよ……」

そう言つと、三神が田を見開く。

「いくら少ししか関わつてねえからつて、アイツらはお前のこと慕つてんだぞ。それを、どうしてお前はわからないんだよ。教師だつてそうだ。このこと知つたら、ショック受けるだろ。お前の家庭の事情は知らねえけど、親だつて少なからず心配はする」

なのに、どうしてわかんねえんだ。

そう言ひながら襟を放すと、三神はその場にへたれこんだ。そして、無言で泣き出した。

溢れてくる涙は、そのまま重力に従つて廊下を濡らした。

俺は、それを見ながらノートを力任せに破つた。

その音に気づいた三神は、信じられないような眼でこちらを見てきた。

三神が何かを言おうとしたが、俺はそれを遮るように言つた。

「ほんまもんあつても、勉強できねえだらうが。お前が傷つくだけだろ」

それでも必要なのか。

そう言えば、三神は泣きながら「いらない」と首を振つた。

もうすでに原形をとどめていないノートを左手に握つて、三神の

前にしゃがむ。

それに驚いて後退りしようと三神の腕を、空いている右手で掴んだ。

「え、あの、柄、せん、わつ！？」

掴んだ腕をそのまま引っ張ると、三神が前のめりになる。支えをなくしたその体は、必然的に俺の腕の中に収まるわけで。

そう。三神は俺の腕の中だ。

慌てていた三神は、更に慌てて暴れようとすると、が、男の俺に三神が力で勝てるわけない。初鹿野とは違うのだ。俺が三神の体をホールドすれば、暴れるに暴れられない。

最初から敵わないとわかつていた三神は、すぐに抵抗するのをやめた。

それを見て俺は力を少し緩めた。代わりに、少しだけ「ちりぢり」と三神の体を寄せた。三神は、俺の突飛な行動に怯えているのだろう。が、震える手が俺の制服の裾をきゅ、と掴んできて、そんなに警戒していられないことがわかった。

数分後、俺たちは互いに恥ずかしくなって、その場から逃げるようになってしまった。

ああ。

あんなことしてしまつたら。

あんなことしてしまつたら。

(もう、嫌いとか言えねえじゃねえか…………っー)
(先輩に会つたびに、頭がおかしくなりやうじやないですか
っー)

門先輩に抱き寄せられた後、私も門先輩も恥ずかしくなつてしまつて、その場から逃げるようにして帰つた。

そのときは気づかなかつたが夜、家に帰つてから重要なことを思い出した。

「数学のノート、どうしよう……。」

私のボロボロになつた数学のノートは、門先輩がビリビリに破つてしまつた。でも、むしろあのノートは、ああしたほうがよかつたのかもしれない。

そう思いながら、門先輩の言つていたことを思い出す。

『こんなものがあつても、お前が傷つくだけだ』

あの人は、私のことが嫌いなのに、どうしてあんなこと言つたんだろう。

門先輩は、どうも掴めない人だ。私のことを嫌いと言つたかと思えば、私のことを慰めるようなこともする。気まぐれなのだろうか？でも……、

今日のあのことを思い出して、顔が熱くなる。高峰先輩の笑顔を見たときと同じように。それに、鼓動も速くなつた。しかも、高峰先輩のとき以上に。

嫌いな人なのに、どうしてこんなになつてるの……。

そんなことより、数学のノートは dizu より。私は ~~丁寧~~ せてもう
えるような友達がない。私のクラスに味方はいないのだ。
私はそんなことを考えつつ、妙に疲れていたので、眠りにつくこ
とにした。

リビングの机には、ラップをかけた夕食を一人分置いておいた。

翌朝。

教室に向かっていると、教室のドアの横でカバンを肩にかけたま
ま俯いている柵先輩の姿があつた。眠いのか、ときどき欠伸をして
いる。教室に入っていく女子生徒たちは皆、柵先輩に見惚れて頬を
染めていた。

どうしよう。昨日あんなことがあつたせいで、先輩の顔を見るの
が気まずい。

そんなことで私が内心焦っていると、柵先輩と目が合つた。

……最悪つ。

瞬間、私は顔が熱くなつた。きっと、私の顔は赤いだろう。ああ、
最悪だ。

顔を見られないように慌てて俯く。それから、チラとなるべく顔
を上げないように先輩を見ると、先輩も顔を赤くしていた。先輩も
昨日のことを思い出してしまつたようだ。

私がその場で俯いていると、先輩がこちらに歩いてきた。廊下を

歩いている子や、教室にいる子たちがこちらを凝視してくる。そんなに見なくてもいいじゃん……っ！

そう思つてゐると、先輩が私の前に何かを差し出してきた。

ゆつくりと顔を上げると、そこには、薄汚れたノートが5冊ほどあつた。どれも油性ペンで『数学』と書かれている。ノートの右端のほうを見てみれば、門先輩の名前と『1年5組』の文字。

私は、ぱつと顔を上げて先輩を見た。

先輩は、赤い顔をしながら、気まずそうに目を伏せつつ、私と目を合わせないようにしながらこちらを見ていた。

「あ、あの、先輩、このノート……、」

「お前のノート、昨日あんなにしちましたから、その……」

門先輩は、いつもとは180度違う態度で話していた。私はそれに拍子抜けしてしまい、思わず先輩を見つめてしまう。

それで恥ずかしくなつたのか、ヤケ自棄になつたのか、先輩は少し大きな声で言つた。

「俺が使つてたノートやるよ！――」

先輩はそう言つて私にノートを押しつけて行つてしまつた。右手が使えない私は、突然のことでノートを受け取れず、何冊かが廊下に落ちた。

そんなことにも気にせず先輩が走つていつたほうを見つめると、今やつてきた人が静寂を破つた。その場にいる生徒みんなが、そちらを向く。

静寂を破つた人物は、

「あら、なんかすごい人だかりじゃないの」

「うわ、なんだこれ……、」

初鹿野先輩と高峰先輩だつた。

空氣を読まずに、初鹿野先輩がズカズカと歩いてくる。その後に、高峰先輩が気まずそうについてきた。

「どうしたの？」

「え、いや、あの……、くつ、柵先輩が、その、こ、これを持ってきて、それで……、」

「柵はもう行っちゃつた？」

「は、はい……」

「そう……」

私の言葉に、初鹿野先輩が腰に手を当てて、じる、と後ろの高峰先輩を見た。というより睨んだ。それに高峰先輩が縮こまる。周りの空氣も一瞬凍つた。

初鹿野先輩は、たまにすぐ怖くなる。どうしてなんだろうか？と、私が思つていると、初鹿野先輩が私のほうを向いた。それに、今度は私がビックリする。

「ねえ」

「あつ、はいつ。な、なんですか、つ

「そのノート、どうしたの？」

驚く私を無視して、初鹿野先輩が落ちているノートを指さす。それによつと気づいて、私はノートを拾つた。

「あの、これ、柵先輩がくれて……、」

「柵が？ 全部数学のノートよね、それ」

「あ、はい。その、昨日数学のノートを、柵先輩が破つてしまつて……。でつ、でも、違うんですよ！ 先輩は、悪氣があつてやつたんじやなくて、その、えつと、」

言葉が足りなくて焦る私。それを見て、初鹿野先輩は笑つて言った。

「言わなくてもいいわよ。だいたい事情はわかつたから」

その言葉に私がほつとしたとき、初鹿野先輩は片方の口角をあげながら言つた。

「今度そのノートに何かされたら、あたしに言つてね

「……え、」

「門には、一言言つておくわ。じゃあ、またね」

「あ、あの、せんぱ」

私が引き止めようとしたとき。

初鹿野先輩は何かを思い出したかのように足を止めて、こちらを振り向いた。

そして。

「慧ちゃんに酷いことするなんて、自殺行為よね！」

そう言つた初鹿野先輩の声は、やけにはつきりと通つていて、瞳は獲物を狙つている獣のようだつた。顔は笑つてゐるのに、目はまつたく笑つていなくて、とても冷酷で残酷なものだつた。

ただただ、ゾッとした。

私はその場に貼り付けられたかのように動けなくなつて、教室にいる生徒の一部は、顔を真つ青にしていた。

そんな私たちを尻目に、初鹿野先輩はいつもの調子で歩いていく。

その後ろ姿を見ながら、私の中には疑問の渦が巻いた。

初鹿野先輩は、いい人じゃないの？

本当は、とても冷徹で、残酷な人なの？

「おい、お前ら。どうしたんだ？」
疑問符で埋まっていく私を現実に引き戻したのは、担任の声だつた。

初鹿野先輩はいい人なのに。
本当は、すごくいい人なのに。

初鹿野先輩のあの顔と瞳が、私の頭から離れなかつた。

門先輩から数学のノートを貰った。

初鹿野先輩の残酷で冷徹な瞳を見た。

そんなことがあってから、私の周囲の状況は一変した。いじめは減った。まだつつかかってくる人はいるものの、大きないじめはなくなつた。

その代わり、クラスの子たちの視線が痛い。私を蔑むような、冷たいような眼。

いじめが減つたから良かつた。

私は、そんなこと思つていなかつた。いじめて欲しいわけではない。でも、白い眼で見られるくらいなら、まだ直接的なもののほうが気が楽なのだ。

私は、今の状況のほうが辛かつた。

右腕は、あと少しでギブスが取れる。そうすれば、両腕が自由だ。リハビリもあるけど、左腕だけよりは全然マシだ。

そんなことを思いながら、私はボンヤリと外を眺めていた。私の後ろでは、クラスの子たちがいつも以上に騒いでいる。

なんだろう？ 今日は何があるのだろうか？

そう思つたが、そんな考えはすぐに頭の片隅に追いやつた。

私には関係のないことだ。あの子たちの輪の中に、私は入っていないのだから。

そのとき、私の脳裏に中学生のときの記憶がよぎった。

こういうふうにしていた私に、一人だけ、声をかけてくれた子がいた。

私は、その子と友達だった。私の数少ない友達のうちの一人だ。でも、その子は中2のときに転校してしまった。それから、私はひとりになつたのだ。

あの子は今、何をしているのだろうか。

そんな想いは、強く吹いてきた風に攫われていった。

黒板に書かれた名前に、私は目を疑つていた。

『山本 香織』

そんな私を尻目に、教卓の横で黒髪をひとつに束ねた明るい表情の女の子が口を開いた。

「沢田高校から転校してきました、山本 香織です！ みなさんと早く仲良くなればいいと思います！ よろしくお願ひします！」

そう言ってにこりと笑う彼女。

私は、彼女を見てなんとも言えない緊張感に包まれた。なぜかはわからない。けれど、緊張していた。

いじめられるとか、そういう緊張ではないのは確かだ。
考えてみると、答えはすぐに出了。

そんな私の考え方、チャイムセイムが遮った。

休み時間。

当然の如く、転校生の周りには人だかりができていた。そこを中心に、教室は賑やかだ。

いつもの私なら、きっとそれを見ているだけだろう。

しかし、今日は違う。今日は、あの輪に入れなくて、あの子と話すことができればいいと思つた。

でも、普段そんなことしないせいで、輪の中に上手く入つていけない。

私は、おどおどしているだけだった。

そんな私の耳に、言葉が入ってきた。

『ねえ、山本さん』

『何?』

『あの子、三神 慧つていうんだけどね……、』

私は、それを聞かないようにした。そちらに背中を向けたら、指をさされた。横目で見える。それに、本人たちは小声で話している

ようだが、生憎、私は耳がいい。聞こえない部分もあるが、だいたいは聞き取れる。

きっと、私のことを気に入らない人が、転校生に色々と吹き込んでいるのだろう。ああ、本当に、同じ人間と認識したくない。

そう思つたとき。

「慧のこと悪く言つてんじゃないわよーー！」

そんな大きな声が聞こえてきた。

私は、自分の名前が大声で言われたことに驚いて、そちらを向いた。

そこには、人だかりの中立つている彼女がいた。それも、眉間に思い切り皺を寄せて、怒った表情をしながら。

一体何だというのだ。

どうして彼女はあんなに怒つてているんだろうか？

私だけじゃなく、彼女の周りにいた子たちも全く状況が理解できていらないようだつた。人だかりの間から、驚きを隠せないでいる斎藤さんが見えた。

そんなことも気にせず、彼女は言葉を発していく。

「慧を虐めるですつて？『冗談じゃないわ！』なんでウチがクラスの子を虐めなきゃいけないのよ。ウチをアンタ等みたいなクズ野郎の仲間にしないで！ 転校は何度もしてるから、初めての場所なんて慣れてるの。どう思われたつて、全然気にならないわ。だから言わせてもらひつけど、」

彼女の口から出てくる言葉は、大分すごいものが混じつていて、それを自覚しているのだろうか。

周りはあまりの希薄に顔を青くしている。

そして、彼女は最後に、齊藤さんに向かって大きな声ではつきりと告げた。

「アンタみたいなクズ同然の人間と同じ空気を吸つてることが、とっても不快で堪らないわね！！」

吐き気がするから、ウチに寄つてこないで。

私や齊藤さん、教室にいた子たちは、みんな信じられないようなものを見る眼で彼女を見た。齊藤さんに至つては、顔面蒼白だった。しかし、彼女はそんなことも気にせず、人を搔き分けて私のほうに歩み寄つてきた。

少し警戒する私の腕を、彼女がとつて教室の外へと引いていった。教室から大分離れた場所で、彼女が止まる。私は、彼女の顔を伺おうとした。

と。

「慧つ！！」

「わつ！？」

彼女が私に飛びついてきた。

何かと驚いている私に、彼女が笑いながら言つた。

「中学校同じだつた、慧よね！」

「ふえつ？ あ、うん、えつと、やつぱり、香織ちゃん？」

「そうだよ！ わあつ、また会えるなんて思つてなかつた！ 嬉しいつ！」

そう言いながら香織ちゃんは私の手を取つた。

私は、それに驚きつつ彼女を見る。

「また仲良くなれよー。」

にこり、と満面の笑みを浮かべる香織ちゃんを見て、私は嬉しくなった。

ああ、温かい。

同じ年のナーナが手を取つてもいたのは、何年ぶりだらうか。

そう思いながら、私は彼女に笑い返した。

「うん」

先日、中学校のときに仲が良かつた香織ちゃんが転校してきた。彼女は負けん気が強くて、威勢がよくて、とっても明るい元気な子だ。そう、それはもう、私なんかと仲良くしているのがもつたいないほど。

そんな彼女は、転校初日、斎藤さんにキツイ一言をきました。私をかばつたのだ。嬉しかつたけど、正直、彼女には迷惑をかけたと思う。私のせいで、香織ちゃんまで虐められたらどうしよう。私の胸の中は、そんな気持ちでいっぱいだった。

けれど。

キツイ一言を言った後、彼女は遠巻きにされていた。でも彼女は、彼女を避けていた子たちに普通に接した。まるで、避けられていないように。

そんな彼女の人柄は、たちまち、人を惹きつけた。虐めなんて、起こらなかつた。

よかつた。

私は、とても安心した。私のせいで彼女まで虐められてしまつたらなんて、そんな心配は余計だつた。私は、今の自分のことだけでも精一杯なんだから、人の心配なんてしていられないのだ。

でも、香織ちゃんのおかげで、私に声をかけてくれる人が増えた。相変わらずの人もいるけど、そんなのはもう、あまり気にならなくなつた。

そんなある日。

途中で行き会つた香織ちゃんと登校していると、後ろから声をかけられた。

「慧ちゃん、おはよーっ！」

久々に聞いた声に、嬉しくなつて振り返る私。そこには、初鹿野先輩たちがいた。

「おっ、おはようございますっ」

「あ、右腕のギブス取れたの？ よかつたじゃない！」

そう笑いながら言つてくる初鹿野先輩の笑みは、前のよつな冷たさはなかつた。

それに、少し安心する私。と。

「その子、転校生だろ？」

今まで初鹿野先輩の後ろで、門先輩（くもんせんぱい）と気まずそうにしていた高峰先輩が、香織ちゃんのほうを見ながら言つた。

それに、香織ちゃんが物怖じせずに笑いながら言つた。

「はじめまして、山本 香織です！ 慧とは、中学校が同じでした！」 よろしくお願いします！」

「元気な子ね。そういう子は好きよ。もちろん、慧ちゃんみたいに清楚で大人しい子も好きだけどねー！」

そう言いながら私の頭を撫でてくる初鹿野先輩。その言葉に、私は顔が熱くなる。

「あたしは2年1組の初鹿野 涼よ。よろしくね、香織ちゃん

「はい！」

数分もせずに親しげに話す二人を見て、この二人は似ているなあ、と思つた。

「ほら、アンタらもそんなシケたツラしてないで自己紹介しなさい

よ

「？ 先輩たち、喧嘩してるんですか？」

キヨトンとする香織ちゃんに、初鹿野先輩が肩をすくめて言った。

「喧嘩ではないと思つけど、軽く修羅場ね」

「「はあッ！？」」

初鹿野先輩の発した言葉に、高峰先輩と柵先輩が同時に声をあげる。

「しゅ、修羅場じゃねえよ！ なあ、瑞紀！」

「お、おう！ 全然全く何が修羅場なんだよ！ 初鹿野は相変わらず意味不明だな、高峰！」

動搖しまくつている二人を見て、初鹿野先輩は顔を背けて必死に笑いを堪えている。

香織ちゃんは少し困った顔をしながら私を見てきた。

そんな香織ちゃんに、私は二人のことを話した。

「えつと、香織ちゃん。この人たちは、高峰 韻平先輩と、柵 瑞紀先輩。初鹿野先輩と同じクラスだよ」

「ふーん……」

私の話を聞いてから、香織ちゃんが一人ににじり寄つていぐ。二人は一步後退して香織ちゃんを見る。

数秒間の沈黙の後、香織ちゃんが口を開いた。

「先輩たちって、慧のこと好きなんですか？」

その言葉を聞いて、私はフリーズしてしまった。

今日の前にいるこの子は、一体何を言つていいのだろう。

我に返つた私は、慌てて香織ちゃんに言つ。

「かつ、香織ちゃんつ、な、なな何言つてるのつー？ 先輩たちがつ、私のこと、す、すすすすす好きなんて、あつ、あああるわけないよ！」

「わかんないじゃーんつ。さつき初鹿野先輩が言つてたこと、先輩たちの表情見れば少しは疑つちゃうもん。で、どうなんですかっ！」

香織ちゃんは、更に楽しそうに先輩たちに問ひ。

先輩たちはといえば、引きつった顔をしながら、香織ちゃんから逃げようとしていた。

そこに、初鹿野先輩が助け舟を出す。

「香織ちゃん、それぐらいにしてあげなさいよ。一人が可哀想じやない」

初鹿野先輩の言葉を聞いて、高峰先輩と門先輩が「初鹿野……っ！」と感動していた。

私は失礼ながら、初鹿野先輩が一人に助け舟を出すなんて、珍しいな、と思った。別に、彼女がそんな冷たい人だとは思っていない。ただ、一人には冷たい感じだからと思つただけだ。

と、初鹿野先輩は続けて言つ。

「後で一人のことはたっぷり教えてあげるから」

「「おい……」」

……、やっぱり、先輩は変わっていなかつた。結局、中身はそんな感じなのだ。

香織ちゃんは、それを聞いて喜んでいる。

私は思つた。

この二人、似てるなあ……。

楽しそうに話を始める一人の背中を見ながら、私はぼーっとして

いた。

後ろで門先輩と高峰先輩が顔を真っ赤にしてボソボソと何か言つていたが、それはたぶん、気にしなくてもいいものだらう。

(あの転校生、三神の友達にしては豪快だつたな……)
(いや、危険だ……。豪快なんてもんじやない)
(（はあ……）

九月。たとえ暦上で秋だらうと、やつぱりまだ暑い。真昼の日差しは弱まることを知らず、大地を焼く。

私は、今日も今日とでパシられていた。それはまあ、香織ちゃんが来てからというもの、私をいじめたりパシリにする人は減つた。それでも、彼女がいないところで私を使う人も、虐める人もいる。運動神経も良くて、勉強もできて、歌もうまくて、手先も器用で、目も耳もいい彼女だけど、目の届かない範囲だつてある。

けれど、その虐めだつて、以前よりとてもマシなものになつた。やられたつて、影で悪口を言われたり、パシリにされるくらいだ。それはたぶん、初鹿野先輩のおかげだらう。あの威圧で、派手ないじめをしようなんて思う人は減つたんだ。

私は、あのときの先輩の眼を思い出してゾッとした。

驚くほど冷たい視線。

初鹿野先輩は、謎めいた人だ。頭は良いのだらうけど、詳しい情報はどこにも出回つていない。

私たち一年の間では、あの発言から、初鹿野先輩は裏で恐ろしいことをしている人だという噂が流れている。

でも、あんなに良い人なのだから、そんなことはないだらう。……

……きっと。

私だって、あの人のこと詳しく述べているわけではない。だから、彼女を完全に良い人とは言い切れない。

一体あの人は、どんな人なんだろう……？

そんなことを思いながら廊下を歩いていると、自分の足に足がつ

つかかつた。そのせいで足を踏み出すことができず、私は持つていしたものを感じると強く抱いて、衝撃に備えた。

が。

前のめりに転んだら絶対に来るであろう衝撃が来なかつた。私はそれに呆然としてしまつて、しばらく動くことができなかつた。

そんなときに、聞き覚えのある声が耳に入つってきた。

「この間抜け。お前は何してんだ」

それにハツとして、私は振り返る。

そこには、私の腕を掴んでいる柵先輩がいた。

柵 瑞紀先輩。一年生で、バスケ部に所属している。この先輩は、頭脳明晰、容姿端麗、運動神経抜群という、何から何までパーフェクトな人だ。性格は良いほうなのかわからないが、口が大分悪く、若干荒っぽい性格らしい。しかし、逆にそこがいいらしく、とてもモテる。根は優しいことは、私もよく知っている。けれど、私はこの先輩が嫌いだ。

なぜか。そんなのは簡単だ。

柵先輩は私が嫌いだからだ。

柵先輩は、豪快な人だ。簡単に言えば、私とは正反対の人なのだ。人によつては異なるだろうけれど、人間という生き物は自分とは違う人に惹かれるらしい。けれど、私は違うのだ。

この人は、私に面と向かつて嫌いと言つてきた。それも、はつきりと。そこは問題ないのだ。

私が気に入らないのは、人それぞれの性格で、それには治るもの治らないものがあるのに、それを彼が否定したということだ。

彼に悪気があるわけではないことはわかつてゐる。けれど、彼のあの言い草には腹が立つた。

とにかく、私は彼を好いていない。

そんな先輩が、なぜ私の腕を掴んでいるのか。

私が状況を全く把握できていないでいると、柵先輩は私の腕を放した。それに、柵先輩が助けてくれたということに今更気づく。柵先輩のほうを見ると、彼は眉根を寄せて溜息を吐いてからこう言つてきた。

「今日も相変わらずパシリにされて、その上自分の足に足がからまつて転びそうになつたなんて、お前は相変わらず抜けてるな」

その言葉にカチンときた私は、今日は珍しく彼に言い返した。いつもならここでわたわたするが、今日は違うということを思い知らせてやる。

「…………ま、間抜けな人に間抜けだなんて、い、言われたくありません」

「せん」

「は？」

「私、その、み、見てましたよ」

「…………何をだ」

「せ、先輩、今日の体育でぼーっとしてて顔にサッカーボール当たつてましたよね…………？」

私の言葉に、柵先輩がいかにも「げ、っ」とでも言いたげな顔をした。その顔の右頬にはガーゼが貼つてあり、何箇所かカットバンも貼つてある。

「な、なんで知つてんだよ…………」

「授業のとき、外見てたら、た、たまたまそこが見えたんです…………」

そう。数学の授業のときに、先生の余計な長話が始まつたので退屈凌ぎのために外を見たら、たまたまそれが見えたのだ。

思わず笑いそうになつてしまい慌てて目をそらしたが、運動神経抜群の先輩がそんなふうになるなんて面白いな、と思つた。

私が言えれば、先輩は大きな溜息を吐いた。

それから、私に顔を近づけて、小声で言つてきた。

「そ、そのこと、黙つてろよ……」

たぶん、恥ずかしかったのだろう。運動神経抜群なんて言われているのに、顔面にサッカーボールがあたるなんて。私でもしないミスだ。

私は、門先輩に頷いた。それから、彼に言つてみた。

「わ、私は言いませんけど、その、先輩人気だし、そんなこと、あつという間に先輩のクラスの女の子たちが広めてしまつと思ひますよ……？」

それに、先輩が「そうだつた」とショックを受けて、肩を落とした。

そんな先輩を見て、少し可笑しく思つ。

堪え切れなかつた笑いが、私の口から漏れる。

その声を聞いて、先輩が私を睨んできた。それでも、顔が赤いせいであまり迫力はなかつた。

「……笑つてんじゃねえよ」

「す、すいません……つ。で、でも、こんな先輩はあんまり見ないんで、その、可笑しくて……つ」

笑い出すとなかなか止まらず、私はその場で笑つていた。

と、門先輩が黙り込んでしまつたことに気づいて、顔を上げてみる。

そこには、私のことを凝視している先輩がいた。なんだろうと思つて、先輩に声をかける。

「あ、あの、先輩……？」

もしかして、怒つているのだろうか？

そんなことを思つてしまい、一氣にいつもどおりに戻る私。怒鳴られるかもしれないと思つてはいるが、先輩の口からは以外な言葉が出てきた。

「お前、いつもわざわざって笑つてるよ……」

「へ?」

「……、つ、あ、いや、なつ、なんでもねえよ! も、もう授業始

まるから、俺行く!」

「えつ、あの、せつ、先輩!-?」

慌ててそう言つて、先輩は行つてしまつた。
私はただ呆然とそこに立つて立つだけだった。

可笑しな先輩。

(俺は一体何を言つてるんだよ……-.)

18・可笑しな先輩（後書き）

なんか季節感統一してなくてすいません；

「あつざー…………」

俺たちは今、屋上のちょうど日陰になつている場所に陣取つて、
昼休みを過ぐしている。

九月と言つても、まだ上旬。八月の気温と大差はない。逆に言つ
てしまえば、この季節で涼しい地域なんて、北海道ぐらいだ。
そんなことを踏まえてか知らないが、高峰がグッタリしながら言
葉を漏らす。

確かに暑い。真夏の気温だ。

かく言つ俺も、この暑さには参つてゐる。弁当を食べつ氣になら
ない。一緒に弁当を食べてごる三神と山本もあまり食が進んでいな
い。

が、そんな俺たちを尻目に一人だけ平然とおかしな本を読んでい
る奴が一人。

「暑い、暑いなんて言つてたつて、涼しくならないわよー」

そう、初鹿野だ。

なんでコイツは汗ひとつかいていないんだ……！？

「お前は暑くねえのかよ！」

すかさず高峰がつっこむ。

その質問に、初鹿野が本から田を離さず答える。

「暑いわよ。こんな気温で暑くないってこいつほどあたしは狂つちゃ
いないわ」

「うそつけ

「なんか言つた？」

「何でもないです」

初鹿野の言葉に、小声で高峰が呟く。それを聞いて、初鹿野が圧をかける。

まあ、高峰の気持ちもわからないでもない。もとから初鹿野は狂つていいのだ。

そんなことを思つていると、初鹿野の強烈なパンチが俺の顔面にヒットした。

「いてえな！ 何すんだテメエ！」

「アンタが変なこと考へてるからでしょ。顔に出てるわよ
しまつた。俺はそんなに考へてこることが顔に出やすいのか。

マズイマズイ。これはどうにかしなければ。
そんなことを考へていると、ふと、初鹿野が言葉をもじりした。

「そりいえば、そろそろ文化祭のシーズンね」

「あ？」

急で一瞬理解できなかつたが、すぐになんのことがわかつた。
高峰もわかつたようで、話に乗つてくる。

「ああ。もつ九月だしな」

「そうだな。早いもんだなあ」

「今年もなんか面白いことないかしらねえ」

と、盛り上がる俺たちの横で、きょとんとしている一年一人に気づいて、初鹿野が説明をする。

「あのね、こここの学校は、九月の後半に文化祭があるのよ。それで、この時期になるとそろそろ準備が始まるのよ」

「うう。

俺の学校はこの時期になると文化祭の準備を始める。生徒会を中心いて、各クラス出し物を決めたり、それぞれの委員会を決めたり。とにかく忙しくなるのだ。

「ま、文化祭の準備のことは描いといて。こここの高校の文化祭は、まあどこのにあるような文化祭なんだけどね。期間は四日間。日ごとに大きなイベントがあるのよ。一日目は、開会式。二日目は、軽音楽部のコンサート。三日目は、アクロバットコンテスト。で、四日目は閉会式と後夜祭ね。あたしの一押しはアクロバットコンテストなんだけど、やっぱり一番盛り上るのは後夜祭かしら」

初鹿野の話を聞いて驚く三神と山本。まあ、アクロバットコンテストなんともに驚かない奴はないだろ。この学校は、平均より身体能力が高い。故に、そんなものまで校長が作り出してしまつたのだ。まあ、アクロバットコンテストは希望者だけが参加だが。

「毎年すごいわよー。大勢の人気が来てねー。とつても盛り上がるのよ」

「ま、後片付けは大変だけな」

「なんで後の話すんだよ、テメエは」

「そうよ、余計なこと言つんじやないわよバカ峰」

空氣を読まない高峰を小突く。

「へえーつーなんか凄そうですね！　楽しみだなあつ。ねつ、慧！」

「ふえつー？ そ、そうかな……？」

文化祭のことを聞いて興奮する山本。それとは逆に、三神の反応はぱつとしないものだった。

そんな三神に、山本が言ひ。

「まあ、慧は大勢でやることとか苦手だもんねー。人見知り激しいし」

「接客担当にさえならなきゃいいわよ」

初鹿野の言葉を聞いて、三神が困り顔をしながら頷く。

と、昼休み終了のチャイムが鳴った。それを聞いて、屋上にいる生徒は一斉に移動し始める。

「俺たちもそろそろ行こうぜ」

「あー……、五時限目古典かよー……、最悪

「ま、高峰は確実に当たられる席だしね。古典、アンタの苦手教科でしょ」

「ああ、そうだよ。もう、なんで教卓の真ん前なんかになっちまつたんだよ……！」

一気に暗くなる高峰の背中を叩いてやる。ああ、哀れな高峰。

「私たちも、行こつか……」

「そうだね。五時限目なんだつたつけ？」

「えつと、たぶん、英語……？」

「あー、億劫。寝ちゃおつかなー」

一年二人組みも、重いからだを動かして移動を始める。

文化祭か……。

「のとき、俺はよくわからないが嫌な予感がしてたまらなかつた。

そして、それは見事に的中してしまつのだつた。

19・文化祭の「」（後書き）

最近更新おろそかでスイマセン；

「ついて」ことで、学園祭の出し物の案がある人はいますかー？」

クラス委員長がクラス全体に声をかける。

黒板には大きく、『学園祭出し物案』と書いてある。

委員長の言葉を聞くなり、今まで「うずうず」していた生徒たちが一斉におしゃべりを始める。

とつとつに、委員長は「静かに！」と声を張り上げる。

私はそんなのを見ながらボンヤリしていた。

学園祭は、みんなが楽しめるからいいと思つ。みんなが楽しめるなら、私はそれでかまわない。

だけど、その輪の中に入らうとは思わない。

大勢は嫌いだ。賑やかなのも、うるさいのも、一人のほうが好き。

正直なところ、学園祭は憂鬱なのだ。だから、出し物なんてどうでもよかつた。

私がそんなことを思つてつらつらと、出し物についての意見が出ていた。

黒板には、案が4つほど書いてある。

手作り小物店、喫茶店、射的、推理ゲーム。

なんだか定番のものばかりだなあ、なんて思つてると、委員長

が誰かを指した。それから、聞き慣れた声が楽しそうに囁く。

「シンドレラの劇がやりたいです！」

そちらを見れば、私の唯一と言つてもいいほどの友人、香織ちゃんがいた。

香織ちゃんの言葉に、みんながまた騒がしくなる。委員長がまた注意する。

静かになつてから、委員長が言つ。

「とりあえず、第一から第三までの候補を決めます」

多数決の結果、第一が劇、第二が喫茶店、第三が射的になつた。

何になつても、私には関係ないだろ？

そんな考へは、すぐに切り捨てられる」とになるのだが。

「最悪だよ……つ、！」

「く、櫛先輩……？」

「ああ、気にしないでね、慧ちゃん」

「瑞紀もそんなに落ち込むなよー」

昼休み。いつものように屋上に行くと、柵先輩たちが先にお弁当を食べていた。そこまではいつもどおりだった。ただ、違ったのは、柵先輩がやたらと暗い雰囲気をショットしているところだ。

「柵つたら、文化祭の出し物でこんなに落ち込んでるのよ？ 有り得ないわよね、ホント」

「本当だよ。うらやましいことに上の上ねえよ」

先輩たちのがそんな会話をしているので、私は聞いてみた。

「あ、あの、先輩たちの出し物つて、なんですか……？」
「あしたたちのクラスはね、第一候補が執事喫茶なのよ。無難でしょ？」

執事喫茶なら、全然楽しいのだろうか？

そんなことを思つていると、香織ちゃんが言つた。

「あつ、わかりました！ 柵先輩、執事の格好したくないんですよ！ 女子が群がるから！」

その言葉に、柵先輩がいつそつ暗くなる。おそらく図星なのだろう。

それを見て笑いながら、初鹿野先輩が頷いた。

「そういうこと。コイツ、ソレが嫌で猛反対してたのよ、一人で」「でもよお、そんなに嫌がるか、普通？ 男だつたら喜ぶべきところだろ」

贅沢なヤツめ、とでも言いたげな高峰先輩の言葉に、柵先輩が口を開いた。

「……ねちつこいんだよ、ああいうのは。だから嫌なんだ」

それから、大きな溜息をひとつ吐く。

まあ、たしかにそうだろう。柵先輩はモテるから、当然女子が群がつてくる。それはしつこいだろ。

「高峰たちみたいな貧相な男子は、門のお零れをもらえるかどうかだものねえ」

クツクツと喉の奥で笑いながら初鹿野先輩が言つ。

「貧相とはなんだ、貧相とは！ 僕だって並の顔立ちだぞ！」

「まあ、高峰先輩は平凡な顔つきですねー」

そんな高峰先輩に、香織ちゃんが言つ。それを聞いて、高峰先輩が落ち込んでしまつた。

「ま、そのとおりね。落ち込むことないわよ、高峰。アンタの顔なんて、誰も気にしてないから」

初鹿野先輩の言葉に、さらに落ち込む高峰先輩。

「ところで、慧ちゃんたちは何する予定？」

暗い雰囲気の男子一人を無視しながら、初鹿野先輩が聞いてきた。「うちのクラスは、シンデレラの劇ですよ

「へえ、シンデレラねえ」

そう言ってから、初鹿野先輩が私のほうを向く。それから、ニヤリと口の端を上げながら言つた。

「やっぱり、シンデレラの役は慧ちゃんがふさわしいんじゃないかな

しら？」

それを聞いて、いつの間にか復活していた高峰先輩が頷いた。

「三神は健気だしな。シンデレラだろ、実際」

その言葉に、私は勢いよく首を横に振る。

シンデレラなんて、とんでもない。私はただ、弱虫で口が利けなくて、パシリにされているだけなのだ。

そう思つてはいるところに、門先輩が入つてきた。

「弱氣のコイツに、主役はムリだろ」

声とからつせえし。

それを聞いて、初鹿野先輩のグーが門先輩の後頭部にクリーンヒ

ツトした。わけのわからない声をあげながら、門先輩がうずくまる。

「そんな門先輩を、更に高峰先輩が蹴る。

「アンタ、慧ちゃんに主役はムリとか、いつ決まったの！ ていうか、意地張つてないでピッタリって言いなさいよ！」

「そうだぞ、瑞紀！ 三神！」セシントレーラのはまり役だぞ！ 弱気とか関係ねえよ！」

「つるせえよ！ 本当に」と言つただけだろが！ ジャあ、三神はシンデレラやりてえのかよ！ まずそことうが！」

その言葉に、初鹿野先輩たちが手を止める。それから、二つを見て「えい！」なんていう顔をしてきた。

「え、その、えっと、私は、そ、そんな、主役なんて、いい、です

……っ」

「というか、やる気ないです。

ぼそつと、心中で呟く。

なぜか重くなってしまった空氣。それを打ち破つたのは、香織ちゃんだった。

「まあ、シンデレラの役は誰だつていいんですよ！ 可愛ければ！

とりあえず、もう時間なんで行きましょう！ 慧、行！」

香織ちゃんが、私の手を引く。私は、三人の先輩たちを前に香織ちゃんに連れて行かれた。

「でも、慧ちゃんがシンデレラの役を本当にやつたら、可愛こと思

わない？」

「絶対可愛いよな。なあ、瑞紀」

「……………そうだ、つそ、そうでもないだろ」

（（今頃きかけたな、ハイシ））

出し物の話し合いから三日後、各クラスの出し物が決定した。

私たちのクラスは結局シンデレラの劇になった。

中には内容が似ているようなところがあつたらしく、決めるのが大変だったようだ。

私たちのクラス以外にも劇をやるクラスがいくつあるようで、公演の日 nich を決めなければいけないらしい。

出し物が決まると、やることがひとつと増える。

私たちのクラスの場合は、劇の配役、裏方の配役、衣装作り、脚本作成、小道具大道具の作成。それぞれの係りも決めなければ、仕事が効率よく渉らないだろう。

文化祭の用意もあり、今日から授業は午前中のみになり、午後は文化祭の準備だ。初鹿野先輩曰く、うちの学校は本番までの準備期間が短いらしく、そのかわり午後の授業は潰すらしい。授業の時間が少なくなるので、変わりに課題が大量に出るけど。

そんなんで、今は午後だ。時間というのはあつといつ間に経つてしまふ。私は、この時間がとても嫌だったのだ。

今日は劇の配役や係りを決めてから色々するらしい。

嫌だなあ、なんて思いながら、黒板に書いてある人物の配役を見

た。

王子や家来、魔法使い、いじわるな姉一人の役は決まつたらしい。『いじわるな姉¹』の下に香織ちゃんの名前が書いてあってビックリした。

でも、継母と肝心なシンデレラの役が埋まつていなかつた。主役が決まらなければ、ことが進まない。

周りの状況を把握するために、教室を見渡してみた。委員長の保坂さんを見ると、困つた顔をしていた。

「どうしよう。シンデレラの役、誰かやつてくれない？ あと継母も」

シンデレラの役は、たぶん女子が物怖じして立候補しないのだろう。継母は、さすがに進んでやる子はそんなにいないと思つた。

そう思つてみると、誰かが手を上げたようで、保坂さんがぱつと顔を明るくした。

さされた人は、一言言つた。

「シンデレラ役は、玉野さんがいいとピッタリだと思います！」

一斉に、みんなが玉野さんを見る。

玉野 優子さん。私は彼女のことによく知らないけど、彼女は可愛い。小柄で愛らしい顔をしていて、明るくて。

とても、優しい子だ。

玉野さんのことによく知らないと書つたが、私は少なからず彼女と関わつたことがあつた。

会えば少しだけ話もする。

玉野さんは、私のことを差別しなかつた。

そんな彼女は、クラスでも一目置かれていた。可愛くて、頭もそれなりにいいし、運動だっていろんな場面で活躍していて。私は正反対の人だ。

一人の言葉が広まって、それに大勢の人が賛成した。盛り上がる中で、一人だけは違った。

斎藤さんだ。

彼女は、思い切り嫌そうな顔で玉野さんのほうを見ていた。たぶん、斎藤さんはシンデレラをやりたかったのだろう。たぶん、ムリだつたと思うけど。

残るは継母役。

立候補する子がいるはずもなく。

教室が嫌な空気になりつつあるとき。

不快な声が静寂を破つた。

「継母役、アタシがやります」

声がしたほうを見ると、斎藤さんがいた。ものすごい満面の笑みで。

みんなが唖然としていたが、保坂さんは「ありがと、斎藤さん！」と口を進め始めた。

斎藤さんが満面の笑みで、あんな役を引き受けたなんて。あれは、何か悪いことを企んでいる顔だ。

私はなんとなく、玉野さんのことが心配になつた。

21・配役（後書き）

委員長の名前

保坂 友子ともざかともこ

性格はいたつて真面目で、頭は学年10位の中に入ってる。

テキパキ働く。またに委員長って感じの委員長。

こんなところで公表しちゃう委員長のこと。私は一体何がしたいんだろう（、――、）

「で、結局シンシアの役は慧ちゃんじゃないこと」

劇の配役をした日の翌日の昼休み。
いつものメンバーでいつものように昼食をとっていた。
話題はやっぱり文化祭のことになった。

「シンシアの役は誰になつたんだ?」と高峰先輩が聞いてきたので、香織ちゃんが答えると、初鹿野先輩が冒頭の一言を言った。
高峰先輩と初鹿野先輩は残念そうな顔をしていたが、柵先輩はどうでもいいと言わんばかりにお弁当を黙々と食べていた。

「それで、慧ちゃんは小物づくりの係りになつたわけね

「あ、はい」

「慧は手先が器用だから、ちよつといこわよね!」

「うん」

私は表で何かをするより、見えないところで努力をしていたほうが気が楽だし、自分でも向いていると思う。表で頑張って空振りするより、全然マシだ。

「で、山本は何をするんだ?」

高峰先輩の問いに、香織ちゃんが自信満々に答えた。

「意地悪な姉の一人です！」

それを聞くなり、高峰先輩と柵先輩が口の中に入っていたものを噴き出す。そんな一人の頭を、初鹿野先輩が凄い勢いで叩いた。

「きつたないわねえ、アンタたち！ 女子の前でそんなことするなんて、最悪よ！ 慧けやんや香織けやんに飛んだらどうすんの…！」

例の如く、高峰先輩と柵先輩は頭を押さえながらうめき声を上げる。

「あたしに飛ばしたらこんなんじや済まらないわよ」

その一言に、一人の顔がサアッと青ざめていく。どんなことをされるのかわからないが、そんなに青くなるまで酷いことをされるようだ。初鹿野先輩ならしかねないかも、などと思つた。

「まつたぐ。ごめんね、慧けやん、香織けやん。ここからは後でまたボコボコにしておくから…」

爽やかな笑みを浮かべながら、初鹿野先輩は恐ろしいことを口にした。明日、高峰先輩と柵先輩が痣だらけになつていないうことを願おう。

「あ、あの、先輩たちは、喫茶店をすることになつたんですか……？」

ふと思い出して、初鹿野先輩に聞いてみる。

すると、初鹿野先輩の隣でうずくまつっていた柵先輩の周りの空気が一気に暗くなつた。それを見て、一瞬まずいと思つた。

が、そんな柵先輩を知つてか知らずか、初鹿野先輩と高峰先輩がニヤつと笑つてうなずいた。

「そつ。似たような出し物のところがあつたんだけど、みんなうちのクラスに譲つてくれたのよ」

「柵がいるからな、うちのクラス」

高峰先輩の言葉で、大抵予想がついた。

「各クラスの委員長に女子が何人かいたんだけど、うちのクラスの提案を聞いた瞬間、すごい剣幕で『それでいいです』って連呼したんだつて。流石に、うちのクラスの委員長も引いてたけどねー」「ま、どちらにしろ決まったからいいじゃねえか」

「昨日の係り決めのときはすごかつたんだよ。初鹿野以外の女子全員が声そろえて『柵くんは接客で決まり!』なんて言つたもんだから、俺たちが反抗なんてできたもんじゃない。ま、賛成だったけどな」

柵以外は。

一言付け加える高峰先輩の視線の先には、落ち込んでいる柵先輩の姿があつた。

でも、確かに柵先輩が接客をすればお客様が集まるだろう。主に、女性客が。

そんなことを思つてはいるが、香織ちゃんが柵先輩に言つた。

「柵先輩も、そんなに落ち込むことないじゃないですか。ちょっと疲れるだけですよ」

それに、柵先輩が疲れたような顔を上げて言つた。

「お前にはわからんねえよ……。あの女たちの恐ろしさが……！」

そんな柄先輩に、初鹿野先輩が背中を強く叩いて言った。

「馬鹿ねえ、柄。怖いとかへたれてんじゃないわよ！ そんなん、適当に受け流せばいいのよ」

すうじい力で叩かれたらしく、柄先輩が咳き込んでいた。

それを見ながら、高峰先輩が苦笑する。

「まあ、お前はできるだらうけどな。同じ女子だし、受け流し方のパターンも豊富にもつてそうだし」

「んー、やうね。じゃあ、私が接客練習のときニアドバイスしてあげるわよ。

軽く言う初鹿野先輩。

そこに、香織ちゃんが聞いた。

「初鹿野先輩と高峰先輩は、なんの係りなんですか？」

「俺は、美化係だ。『ミミの収集と片付け』

高峰先輩が言い終わると、初鹿野先輩が口を開いた。

その口からは、以外なような、それでもないような答えが出てきた。

「あたしは、接客よ。執事の格好して」

「えつ、ほ、ほんとうですか……つ？」

驚きのあまり、思つたことが口から出でてしまった。

「そ。なんでもいいって言つたら、なんかそうなつてたのよね」

「ハイツ、授業中にも関わらず、普通に変な本読んでたんだぜ。最悪だよな」

高峰先輩の言葉を聞いて、初鹿野先輩が「なんですか？」と胸倉をつかんだ。

「い、いえ、なんでもないです……つ、」

「よひしー」

「ぐえつ」

初鹿野先輩が急に手を放して、変な声をあげる高峰先輩。

「でも、初鹿野先輩ならとつても似合ひそうですね！ かつーい
ですよ、絶対！」

「そう？ まあ、お菓子とか盛り付けるよりは全然楽よね」

初鹿野先輩らしい言葉に、思わず笑つてしまつ。

と、そんなところに午後の文化祭準備活動開始五分前のチャイム
が鳴つた。

屋上にいた生徒たちが慌てて戻つていくのを見つつ、私たちも片
づけをはじめた。

「あー、ダリイ。文化祭準備かー……」

「俺、教室行きたくねえ……」

「何へタれてんのよ。頑張りなさい」

そんな先輩たちのやり取りを見ていると、初鹿野先輩と田が合つ
た。

それから、先輩に言われた。

「慧ちゃん、頑張つてね。大丈夫。困つたら、あたしたちに相談し
てくれればいいから」

急にそんなことを言われて呆気にとられてしまつたが、すぐにな
んのことかわかり、私はつなづいた。

賑やかな教室。

委員長の保坂さんが声を張り上げないと指示が通らないくらい騒がしい。

舞台に立つ人たちは演技の練習。

衣装を作る人たちは裁縫。

大道具を作る人たちは大変な作業。

私は、そんな人たちを見ながら小道具を作っていた。

小道具の係りは少ない。私を含めて四人だ。そのほかは、大道具と衣装作りにまわっている。

まあ、小道具にそんなに人数がいても困るだろう。四人ぐらいが丁度いいのかもしれない。

今私の手の中にあるのは、シンデレラのガラスの靴だ。

もちろん、ガラスではできていない。靴はハイヒールの白のものを、派手すぎずに、それでも煌びやかに見えるように小さなビーズのアクセサリーをつけた。ワンポイントにすれば、それで十分だろ

う。

自分でいうのもなんだけれど、私は手先が器用なほうだ。普段から料理もしなければならない身であるので、手先が器用でないと困るのだ。

だから、私は小道具係で十分だった。はつきり言つて、じつじつ地味な作業のほうが好きだ。

わりかし上手くできた靴を見て、私は思わず、につこりと笑ってしまった。普段あまり笑わないので、こんなことは珍しいと自分で思う。

ふと、じちらに視線を感じた。

視線を感じたほうを見ると、私の前に座っていた加々美くんが私のほうをじつと見ていた。

それに驚いて、慌てていつもの表情に戻す。

「なつ、なに……つ？」

私の質問に、今度は加々美くんが慌てて答える。

「い、いやつ、なんでも、つない！ そ、それより、上手いね、それ」

徐々に小さくなつていぐ声とともに、おずおずと出てきた人差し指がさす先には、私の手の内にある靴だった。

彼の言葉に、私は言つ。

「そ、そんなこと、ないよ……つ。私、何もできない、から……せめて、これぐらいのことはしないと……、ね……」

そう。私には、これぐらいしかできない。

自分で言つっていても、惨めになつてくる。いじめられていて、こんな場面でも大きな役に立てないなんて。

なんて私は惨めなんだろう。

いつそのこと、消えてなくなつてしまえばいいのに。

そんなことを思いながら俯いていると、加々美くんは、弱いけれどやけにさつきつとした声で言った。

「何もできないなんて、僕は、違うと思つた。僕、あんまり学校来れないから、よくわかんないけど……。僕がいつも見る三神さんは、気が利く三神さんなんだ」

それを聞いて、私は驚いて顔を上げた。
加々美くんを見ると、優しく笑っていた。

その田は長めの前髪で隙間からしか見えなかつたが、馬鹿になどしていなかつた。

体が弱い彼は、学校にあまり来れていない。私も、あまり加々美くんのことを気にしていなかつた。自分のことで精一杯だったから、彼のことなど眼中にななかつたのだ。

なのに、彼は私を見ていた。

いじめられていて、惨めな私を、香織ちゃんや初鹿野先輩たちと同じ視点で。

周りの子達とは、別の視点で。

私は、震んできた視界に気づいて、下を向く。それから、田をぎゅっとつぶつた。

涙が零れてしまわないよう、元気づけ。強く。

こんなことで泣いているなんて、呆れられるだろう。
でも、私には彼の優しさが嬉しかつた。

なんとか涙を堪えて、向き直る。

それから、上手く笑えていないかもしない顔で言った。

「ありがとう」

そう言つた私に、加々美くんは笑つた。

「うん」

なんとなくけれど、彼とは気が合ひ気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8386t/>

先輩なんて大嫌い。

2011年12月7日12時51分発行